

国語

五卷

— 私の家庭劇 —

田中千禾夫

登場人物

西村明太

〃 雪

〃 月

兵部一郎

〃 御鈴 みすず

〃 咲太郎

速水春彦

望 のぞみ 参吉

山口花

柊さん

佐田さん

立花さん

久保さん

県君 あがた

巡查

儒者（のちに医者）

日本甲冑

西洋甲冑

山口寅吉（登場するかどうか）

## 1の巻

幕が上がると、

無地の中幕の前に中年の奥さんたちが頭を下げて並んだ。

詳細は後述するとして、柗さん、佐田さん、久保さん、立花さんの四人。

顔を上げた。場ちがいのところに出された感じで、照れてもじもじしたり、意味なく笑ったり。

なんか言うの。

じゃ、あなた一等等お背がお高いから、あなた代表でなさいませよ。

あら、いつでもあたたくしそれで目つけられて損するわ。

貫禄がおありなんざんすもの、ね。

どうぞ、お願い。

しどいわ。じゃ……

久保さんだけは物を言わず、手で押したりするだけ。

背の高いのが改まった。

あ、あのう、あたしたち今日、なんでここによばれて参りましたかといいますと、これからここで国語に関するティーチ・インがあるから、是非ゲストとして参加してくれって先生にたのまれたからなので、そんな大それた資格なんてございませんのですけれど、まあ日頃、子供の教育のことはあたしたち非常に注意を払い、努力もしていることが、お目にとまったからでございますようか。(笑う)

傍のが何か囁いた。

それにあのう、ティーチ・インがテレビにうつされますので、もうテレビに出ますのがあたしたちの日頃の念願でございましたもんですから、何をおいても参加させていただいたわけでございます。(隣へ) もういいかしら。

あのう、ではゲストというんですか、あたしたちの他にもいらっしゃいます。いくら何でもあたしたちだけではねえ。(つつましく手で笑いをおさえた)  
皆さん、どうぞお出になって下さい。

西村明太・西村雪・兵部一郎・儒者・日本の甲冑をつけた者・西洋のそれをつけた

者が出てきて、並んでお辞儀をした。これもそのときに後述する。

(六人に向かい) いたらぬ者ばかりでございます。よろしくどうぞお願いいたします。

六人の者も軽く挨拶した。

そして半分ずつ左右に別れて出て行ったかと思うと、女二人ずつ、急に引き返して、  
こそそと

いったい国語ってなあに？ 国語。

国語？

日本語のことじゃないの。

日本語よ、どうせ。

どちらがうの、国語と日本語と。

他所行きと普段着とのちがいよ。

へえ、そうなの。

ふたり満足して消え、

一方では、

ティーチ・インって何だったかしら。

ティーチ・イン？ 外来語よ。

ガイライって、病院のあれ。とても待たせるわよ、ガイライは。仕様がねえ。(口を押え見物に向かい) みなさんもどうぞそのおつもりで。

お待ちになってね。

暗転。

同時にバッハの音楽。

## 2の巻

荒れるがままの玄書院！

兵部家では玄書院くろとよんだが、段々に貧乏になったから手入れをしない。

正面の下手半分は床の間だが二間けんはあって庶民はちよつと吃驚けんりしたが、これが実は二枚

のドンデン返しの壁、よく見ればその仕掛けだとわかるくらいに割れ目が見えた。南蛮風の絵を描いた布地を張ったが、その模様も今はもうわかりにくい。外国の城らしい。

今ここには、東西中世の槍、銃、鉞、鉞、南洋系の槍、さては捕物用の落葉搔き、それと同じく東西の鎧などが博物館みたいに並べてあった。床の間の上手の半分は襖だが、その前にピアノがおかれ——障壁画は定跡的に緑の松らしい。上手の仕切りも一間と一間の襖だが、取っ手に、殆んど褪めた朱の総が垂れて物々しい。片手ではとてもあくまい。この模様が緑と銀の幾何学模様。玄くろの出所はここだという一説があるが、今、銀がくろずんでくすんでいるので、そうかとも思われる。この模様は京都、桂の離宮の茶室の襖の模様に近い。この二枚の手前はとどころ絞びた宮廷風の御簾がかかっている。

下手の仕切りは書院作りの様式通りだが、明治になって作り替えて、上から下まで、荒く太い棧入りの障子。だいぶ紙が黄色になって、今、破けたところを参吉が張って、終わりの一枚が途中らしい。

昔は畳をしいた。欧風化時代に板張りにし、亡き兵部一郎が、これ幸いと能を舞った。まんに白いテープで輪をえがいた。

天井は金具をはめるほど豪華ではない。板がはがれているのが見える。雨も洩る。シャンデリアが豪華な名残り。ピアノ椅子の横に傍卓。インキスタンド。

色とりどりのスツールが障子側に積み上げたりして十ぐらい、襖側に三つ四つおいてある。

山口花が、襖側のスツールにお尻をのせ、ポツン、沈痛。着物も垢抜けしていない。足許の鼠のスーツケースはこの女の物。

どこかで時計が鈍く四時を打った、かと思うとオートバイが爆烈しながら通過したのは、ここが街の中であることを知らせたいため。季節は暑からず、天気も晴れやらす曇りきれず。

参吉

（ひとり語のように）待たせますな……汽車で二十時間ゆられなすったかねえ！ よくあたる、うちの大奥様のピアノはな。……しかし、子供をおいでよくでてきたなあ……そんなに、僧いか、旦那が……

景気のいい話し声が近づいた。参吉はあわてて、糊の鍋や紙などを片づけて「ただ今」と山口に挨拶して、上手に消えた。

山口は顔をあげ……以下の反応は先生にお任せして、お喋りだけを記録する。

どうせ、そうよ。きまりきったことしか言わないんだ。

校長先生だって定年のこと考えたらね。

ピンからきりまであるんですものね、PTAだって。

あ、あ、あ……（これは含み声）



しかしなんでも値上がりしてんだから。

二千円ぐらい仕様がないわよ。

いっそ止めちゃえばいいの、あんなこと言い出すなら、修学旅行なんて。

又ウベル・ライン！ 又ウベル・ライン！

なにになに？

重箱読みだね。

はっはっはっ……あ、あ、あ。（これは含み声）

あ、しんかんせんか。

話し声の主たちは廊下で立ちどまり、庭を眺めていて、少し前に上手の御簾の陰から参吉が出てきて、山口の上にかがみ、ささやくと、山口は手提から財布を出して紙幣を三枚。男は丁寧にお辞儀をして去った。

眺めながら、

あの鳥、なんじゃ。

どこに。

あそこに。ほら。

スズメ。

ミソサザイ。

ほんと？

(謡った)みそじばかりの女なれば、恐れて内へは入れずただ、北へとのみは行き給え。

あ、水から何かすくったい。

去年、この水干上がっちゃってさ。

大きな鯉だったなあ。

このごろ減ったわ、めっきり。

なにか。

小鳥。

雀もいないじゃん。

スモツグ。

スモツグって独乙語。

コイツ語。

あ、あ、あ、あ、

また御簾が開き、向こう側に参吉が頭を上げ、手拭いで無雑作に鉢巻きした月が急

ぎ足。

西村月——ほんとは露西亜人だが、明治三十七年頃の当時の国際状況から伊太利人として過ごした考古学者ダルメイダと大和撫子、西村雪との間に生まれた娘、今では婆さんだが、肌の色が母の名前のように白い。しかし、自ら合理主義者と称して、自分の女っ気の無さから煩わされまいとしている。背が高くないので茶色の毛のよなガウンを曳きずり、下には実は日本の浴衣を着た。

そのうしろに恭々しく侍立するのは、さっきの白髪のそみの坊主頭の男、無地の紬の着物に、紺の袴をはいた望参吉。  
腰に鍵の束を下げている。

月

ごめんなさい、お待たせして。ゆうべ、麻雀で徹夜しちゃったもんだから。顔もまだ洗ってないのよ。だいたいの話は参ちゃんから聞いたけど（ピアノの方に歩いた）なあに心配することなんてないわよ。めそめそするから男は増長して女をいじめんだ。さ、こっちおいでなさい。ういあんじし、マダム・ういあんじし。

参吉

あなたさま、どうぞ、あちらへ。

四人の中年の女たちがこちらを向いて鬨をまたいだ。同時に参吉は消える。

四人

こんにちは。

月 ぼんじゅうる・めだあむ。御鈴、もう帰るわ。久保さん、どうなさいました、そのほうがいい。お多福風？（ピアノの蓋をあけた）

とってべつに返事を待っているのではないから、久保さんも何か言おうとしただけ。

月

さ、どのキイでもいいから、叩いてごらん。あんたの好きなキイ、どこでもいいわ。さ、ポント。黒いキイでもいいのよ。なんならお眼めつぶって、あてずっぽうに、指突っついてもよろしいのよ。さ……重ねたトランプの中からどれでも一枚抜きとれと言うんでしよう、よく。あれと同じよ、あたしのやり方は。あなたのキイがあなたの心の声になるんだから。さ、どうぞ。しるぐうぶれ、どうぞ。（欠伸を噛み殺した）

恐る恐るポントなった。

さて一方、四人の奥さんたちはこんなこと珍しくないと見え、含み笑って勝手にスツールに陣取った。共通した特長は大なり小なり、肥っているということだ。

月　　ふん、へ調か。なるほど。じゃ、今を中心に、右へ四つ、左へ五つ、どれでも好きなのを叩いてちょうだい。はい、どうぞ。しるづうぶれえ。右へ四つ……

さて、PTA帰りの四人の奥さんたち、

柊さんは映画館の、

佐田さんは中工場の、

久保さんは食料品店の、

立花さんは金物屋の奥さんで、久保さんを除いて三人が着物。夫々に目立たないお洒落をして。

柊さん　ね、リンカーンで御存知。

佐田さん　リンカーン。

柊さん　リンカーン知らはらへんの。

佐田さん　よしてよ、テレビの真似なんか。知ってるけどさ。

月　　もう三つ、もう三つ右へ。そう。あと二つ。(女たちに)なあに、今日は、おそろいで。  
立花さん　TA抜きのP、P、P、P……こちらにおかまいなく、おばあちゃま。

月 その、おばあちやまはやめてもらいたいですね、おでぶちやまたち。

久保さん あ、あ、あ。

佐田さん お互いさまよね。

月 あら、あたくしはいいかげんだわ。

柊さん おばあちやまもヨガ体操なさればいいのに、あたしたちと一緒に。

月 滅相もない。あんなアクロバットみたいなの。(花子に)さ、どうぞ。考えたりしちゃい

けません、考えちゃ。無邪気です。無邪気に叩くのですよ。今度は左ね、左。

柊さん 作文の宿題なのよ。それが。

佐田さん ははあ、それで代筆させられたってわけ、あんたが。学校時代、丙だったあんたが、

はは……

柊さん 気障な先生だったね、文士気取りかなんかでさ、ね。

久保さん ロン中がぼうつとして、物言うどころじゃないのよ私は。

立花さん 早く帰らないかな、鈴ちゃん。

そう言えば久保さん、頭から大きな三角布で頬っぺたを吊っている。

佐田さん あんたいま総入れ歯ね。

久保さん よしてよ、あいた、ツキンときた。もう話しかけないで。

柊さん わが尊敬する人物って題。ママ、誰がいいっていうから、ヘレン・ケラーはどうかしら。

佐田さん あの、失礼さんすけど、さぶちゃん、男の子でいらっしやるんでしょ。

柊さん あら。あれ女の子に見えるさんすかね、へえ！

佐田さん ふふ……でも女の子みたいにやさしいわよ、親に似ず。

立花さん あれで中学だからね、末恐ろしい。

柊さん ちよっと、

佐田さん (かまわず)おばさま、薔薇お好き。どんなお色。赤。なんて言われちゃった、ふふ

……へへ……

立花さん 気持ち悪い！

久保さん ヘレン・ケラーは女だ。

佐田さん だからなにさ。

久保さん だから男に非ず、あつつ……

佐田さん あたしが情熱家だったこと見抜いてくれたのよ、さぶちゃんは。

柊さん またあんたから映画の切符せしめたかったんだわ。まだ未成年さんすからね、うちのは。

誘惑しないでよ。

佐田さん 制服や鞆を駅のロッカーに預けちゃえば、中学も高校も大学も町のおんちゃん並みで

すからね、当節は。

立花さん 背だけは大きい、全く。

柊さん 映画、すいてんでしょ、当節は。(非同情的)

佐田さん (傷つけられた) そうね。でも立ちん坊しなくていいでしょ。

立花さん 今までに儲けすぎたわね、お宅の旦那様。三つも四つも映画館持ってらっしゃるんだもの。

久保さん こんどはボーリングになさればいいわ。あれ、結構くたびれる。

佐田さん あなた、ほんとに虫歯で歯お抜き遊ばしたの。無理して整形手術したんじゃないの。

久保さん あら、あたしそんなにぶざまだったかしらね。子供たちにとられちゃったのよ、カルシウム。あんたなんて、ひとりだもの。

佐田さん リンカーン知らなかったら野口英世にしなさいよ。

柊さん 野口さんねえ。

立花さん はは……

佐田さん あ、河野さんがいい。あの人のおかげで水道から水が出たんだもの、去年の夏は。

久保さん ひどかったわね、去年の夏。

どかどかと足音がしたかと思うと、



がらりと障子が開いて咲太郎が入って、しかし、声はやさしく、

咲太郎 あ、どうも、すみません。あの、ちょっと。

あんまりすまなそうでもなく言いながら、床の間の方に行きながら、

咲太郎 かあちゃんは？ いないの。(わざと、かあちゃん)

月 いねえよ、おめえのかあちゃんは。忙しいんだから。

憎々しげに言った。歯には歯をだ。

咲太郎 うわあ、おめえ。ばあちゃんの頃にまだ火縄銃あった？

月 だめよ、そんなもの玩具にしちゃ、あるもんかね、そんな。おばあちゃんのころはもう機関銃があったんだもの。日露戦争はあれでだいぶ助かったんだよ。

咲太郎 借りてくぜ。

月 あ、あ、どこ持ってくるのさ。

咲太郎 (闕際で振り返り) 娘がさ、火縄銃って何だってきくからね。教科書に出てくるんだよ。

今日は晩ごはんいらない。

月 (肩をそびやかし) お早くお帰り。てりいぶる！

咲太郎は既にさっと出ていった。

久保さん 娘をお殺しになるつもりかしらね。

立花さん ライフル魔？(おろん冗談だ)

月 (笑いながら) バイトに行ってますの、小学生のお嬢さんのお宅へ。

佐田さん へえ、こちらでもバイトなさるんですか、おばあ……さま。

柊さん あたしもお頼みしようかしら。

立花さん 作文助かるし。

柊さん もちよ。

皆、口がくたびれて、笑おうとするだけ。「いい坊やになったわ、咲太郎さん」「就職が大変」「可哀想ね」。

月は、今までの間に山田が叩いた音を譜に記録してメロディのようにそれを鼻歌式に歌ったり……

月 (歌って) イエアオウ……ウオアエイ……あんたもやってごらん、あんたが作った節よ。  
山口 うちがですか。

月 (ピアノでならした) 簡単じゃない。やんなさい。

山口 アイウエオ。

月 ノンノン。それをやるからだめなの、日本人は。発音が乱れますの。イーから始めるの。  
イー……切れ味のいいひびきでしょう。だから異議を唱えたり異端者だったりする。色恋のイはだけど、少し鈍くやわらかい方がよろしいわ。同じイでも趣がちがいますからね。およそ日本語のイは、舌の先ではなく、前の方全体が上顎に向けてもち上がり、唇は上下からしまり気味になる。イー……エ……は唇がむしろ上下に開き気味で、アになるといちばん唇の間がはなれますでしょう。次のオからウにうつるにつれて、開いた唇がまた狭くなる。同時に、アまでは舌の前が働いていたのが、オからは舌の奥が働いている。そういう調音の区別がイエアオウだとはっきりわかるわね。さ、やってごらん。

(ピアノをならした)

山口 (小さく) イエアオウ……

月 そう。もう少し声を大きく出して。

山口 イエアオウ……ウオアエイ……

月 はい。わかりました。

山口 え、

月 ふーん！（つくづくと山口の顔を見た）そういうもんですかね、女って。あんたのアは、  
イ、エ、ア、急に一オクターヴ高くなって、オ、ウ、また急に下がってるでしょう。面  
白いの、実は、そこが。

山口 へえ！

月 あなたは、旦那様を憎んで、大嫌いだと言ったそうですね。それ、うそね。

山口 うんね、先生。

月 ふふ……だいたいね、旦那様が浮気をなさるといふのは、もちろん旦那の浮気そのもの  
が第一にいけません。けれどももしかしてすよ、そうさせるのは奥さんの方にも何かある  
の。奥さんに責任なしとは言えません。

山口 じゃ先生、うちが悪いと言われるのですか。

月 あなたが、とまでは言いません。でも、お盆の前の日とか、誘われて、何とかの太郎兵  
衛さんとビールをのんだ、例えばそういうことが、

山口 あるわ先生、ただ、

月 それを誤解した旦那様もシンプルすぎますけど、あなただって、ほんのいつとき他の男  
に目移りした。それはしかし、あなたに豊かな生命力があたりですってことだものね。

いいのよ。とにかく結論は、国へ、旦那様のところへお帰りなさい。女は妻の座を自分から下りてはなりませんことよ。旦那が好きでしょ、あなた。

山口 (わっと泣き出した)

立花さん こんどの夏は大丈夫でしょうね、水。喉、おかわきにならない。

月 それごらん。憎みたいほど愛していらっしやるでしょ。そうでしょ。明るいうちに東京駅にいらっしやい。駅にはあなたみたいな家出女を狙っている悪い、悪い、狼のような男がいますから、気をつけてね。

山口 (泣きながら) 国へ帰るくらいなら……うち……死にます……死にますけん……

佐田さん 私、あの、台所に行ってくる。

柊さん この人ったらね、去年の夏さ、あたしんちまでバスに乗っておトイレ借りにくるのよ。

たったの一丁場なのに、日に三度。

久保さん バスに乗って(笑いかけて) あいい……

佐田さん 散々恩に着せられちゃった。

柊さん だってそれだけ早く一杯になっちゃうざんしょ。

佐田さん 汲取券五枚も買わされちゃった。

柊さん あら、うそよ二枚よ。

佐田さん だって買えって言わんばかりに一樽券だの半樽券だのって並べて見せるんだもの。

柗さん　ちったあ、われわれ庶民の生活を知っていただこうと思っただね。マンション族に。

佐田さん　そんな劣等意識持たなくてもいいじゃないの。

久保さん　安いときに買ったよ。よかったわね。

佐田さん　だまってなさい、総入れ歯は。

廊下の方から、お盆をさげて、コップに水を持ってきて、佐田さんの前に。

佐田さん　あら、どうしよう。

参吉はだまって消えている。

柗さん　（メモ帳をハンドバックから出して考えていたが）やっぱり、リンカーンにするか。

佐田さんは煙草を吸い出した。

携帯灰皿持参。

立花さん　カインドリイ・リフレエン・フロムスモーキング。

柊さん (佐田に) あんたのことよ。ええと、桜の木を何とかして。

佐田さん あ？

立花さん カインドリイ・リフレエン。

久保さん 教育ママも辛いね。

立花さん 何かに使わしていただかなくちゃね。折角覚えたんだから。

佐田さん 国電の中か何かがいいわ。あんちゃん相手に。

久保さん カインドリイ・リフレエン・オールトーキング……トーキング。

立花さん あ？

柊さん (急に笑い出した) はは……そうそう、ワシントンさんだった、はは……ワシントンと

桜、リンカーンと……馬かな。ふーん。(また考えた)

佐田さん 変だよ、この人。

久保さん 漫才でもしたいのよ、ひとりで。

立花さん (しみじみと) 欲求不満だからねえ。

月は、参吉が持ってきたミルクを旨そうにのんだ。そして山口をなだめていた。山口はついには、また元気になった。(参吉は、のみほしたカップを持ってやはりすぐ消えた)

月　　うまいことおっしゃるのね、立花さん。欲求不満か。

佐田さん　そう言や、たいがいのこと間に合っちゃうんだもの、現代は。うん。

柊さん　昔は、戦争前は、我慢した、大統領に立身出世のため。

立花さん　なら何故、現代は我慢しないんざんしょ。

月　　そりや、天皇さんの押えがだめになったからざんしょ。

久保さん　切り山椒たべたい、あいいい……

柊さん　今にして思えば天皇さん偉かったね。

佐田さん　私は天皇さんいても不満は不満だったな。

久保さん　このお方は惚気みたいなもんです、あ、あ、あ……

佐田さん　あら、私は別に亭主のことなんか言っていないわよ。

立花さん　口では言わなくてもさ。

久保さん　じゃ、あんたの方はどう。

立花さん　どうって。

柊さん　御円満かどうかききたいんですって。

立花さん　ところが、さっぱりよ、うちのは、もう、ごむ管みたいで。

佐田さん　あんまりいじめちゃだめよ。細く長く持たせなくちゃ。亭主ってものは。



立花さん だけど、こう肥ってちや重くて仕様がねえよって言うのよ。

他の三人はききやきや笑った。

月 あのねえ、皆さまってば。あたくしは独身者でございますからね、こう見えて。宿に死に別れてから二十二年、貞女でございますからね。

立花さん いやだわ、おばあちやま。

柊さん 鉢巻きの貞女か。

佐田さん だけど、そんなとき、おいくつざんしたの。

月 三十八、姥桜の真っ盛り、はは……

四人 (笑った)

月 ね、そのへんでストップなさいませよ。ここには、お妾さんが乗りこんできたので追っ出されたか、追っ出たか、可哀そうなお方がいらっしやるんだし。どうも女四人いると、かまびすくより、ぐるてすくになって、話が段々下の方に下がって参りますでしよ。

佐田さん あらら、男たちの方がもっとひどいわよ、ねえ。

三人 そうざんす。おばあちやま。

月 あなた方もいずれはおばあちやまにおなりなのを忘れないで。さ、山口花子さん、奥へ

行きましょ、あたくしの居間に。ここにいると毒だ、あんたみたいなき御婦人には。いらっしやい。(どンドン歩き出し、閩際で)開けてえ……開けてえ参ちゃん。

御簾が動いた。

月

あのね皆さま、あたくしの母はユキと申しました。着物のユキではありません。空から冬に降ってくるユキです。大和撫子で、あたしみたいなガラツパチじゃない。だから伊太利人の考古学者ダルメイダが愛して愛して、ひたむきに愛して、まわりの大反対を根強くはねかえし、夫婦の盃を明神様の神前で取りかわし、やがて日本に帰化して西村明太と名のりました。これがあたくしの親爺、西村とはユキの里の名前ね。二人ともとつくに死んでお墓が青山にございます。(十字を切った)あたくしの名前は月。ダイヤナ！母がユキなればこそ。……おわかり。西村明太は日本を愛し、その象徴たる人間、雪を愛し、また月を愛し……惜しいことに花までは見とどけられなかった。あたくしは明太の志をついで、あたくしの娘に花とつけたかった。そうすれば、雪、<sup>セツ</sup>月、<sup>ゲツ</sup>花、日本のほら、トラディションによる最も純粋な美、幽玄がそろいます、完成します。ところがあたくしの夫であり、娘の父である兵部一郎は反対しました。彼は学問が嫌いでしょ。何故なら、ここが(頭を指し)弱かった。弱いと申しましても、程度問題で、

日本人は昔から、多かれ少なかれ、ここが弱いのと違いますか。しかしその代わり、感覚は鋭くまた繊細で、清潔でした。謡をうたい、鼓を打つことしかしない人。最も幽玄なお人ですから賛成してくれそうなのに反対しました。何故なら、花はあまりに理想でありすぎる故に平凡で、また恐らくそれを名乗る本人自らは、花を理解し、その奥の美しさを会得することはできなからう、……こう申しまして、御鈴と娘に名付けたのです。鈴のように美しい声。はは……鈴ちゃんあんまり声は鈴じゃないわね。

ええと、そこで日本の幽玄トラディションはここで断絶、これも御時勢だ、そう諦めておりましたときに、今日、只今、計らずも後継者出現。ね。即ち、この花さんです。雪、月、花、めでたく揃ってあたくし御満足。さ、ついていらっしやい花！<sup>はな</sup> ああ、おなかすいた。

二人が去ると御簾は下がる。

毒気を抜かれた形の四人の女たちは、ほっとして、

柊さん　すごいね、やっぱりあいの子のばあさまは。

立花さん　あんな演説、あたしたちにやしようたってできやしない。

久保さん　歯痛いの直っちゃった。

佐田さん ああ、こっちも腹ぺこ、喉はかわくし。

柊さん あの女をどうするつもりかしら。

佐田さん 花だとさ。

立花さん 田舎臭いけど、あの眼はどうも只者じゃないね。

久保さん あらそう。どんな風によ。

四人が、囁き合っていると、やっとお待ちかねの女、御鈴が急いで廊下から現われる。

兵部御鈴——料理研究家、デザイナー、旅行記者、ピアニスト、宝石鑑定家、その他色々の肩書きを人はつけたが、何しろ息子はいるが独身で、四分の一の露西亜系で、母親よりも美人だからもてる。出張教授もするから忙しい。これも肥ってる。この頃ヨガに凝ってるのは自分のためでもある。

御鈴 さあさあ、始めましょう。(高く)参ちゃん、帰りましてよ。さ、皆さんもお脱ぎ遊ばし

てね。(手早く、上衣もスカートも脱ぐ)

稽古先から帰ったので、下は体操用の短いシャツと黒いタイツを着こんでいた。

先生、今日はお講義だけざんしょ。

御鈴 お話は具体的にするのがよろしいわ。

具体的にって。

御鈴 あなた方も早くお着物お脱ぎになってちょうだいね。

アジアア！

あなた用意してきた。

帰ろつと。

こら、罰金おいて行きなさい、脱落者は。壱万円。

だってあたしゃ。

このひと、おずろしないのが自慢。心がけがいいの、ふだんから。

じゃ、あなた、なにしてんのさ。

繻絆とおこしよ。

あたしも。

そらわかっている。そんなこときいてんじやないの。こっちは。

あたしはその下、シュミイズと、

ちよつと恥ずかしいな、やっぱり。

うへえ！

あら、このひと、手廻しのいいこと。

スタイル満点や。(もちろん皮肉)

久保 あたしこれでもバレエやってたんだもの。

ほんと。

踊るバレエも、球突きっこするバレエも同じだもん、日本語は。

じゃ、国語に非ずか。

久保さんは早々に服を脱いでいた。半ズボンを着込んでいたからだ。

やるべえ。

人生観変わるかもしれないね。

変わりたいよ。

こんなこんで変わるんなら安いもんだ。

三人は、もうこだわりをすてて帯をとき始めた。

御鈴 お繻絆とお腰でございますか。それはどうも？

いけない、鈴ちゃん。

御鈴 ええ、いけないこともないんですけど、例えば蓮華開花のポーズなんてポーズのときは、

胡坐あぐらをおくみになって仏様におなりになりますから。

え？ 仏様！

皆、顔を見合わせて、

柄かしら。

あのう、先生のお古でもございませんでしうか。

タイツでも、トレーニングパンツでも。

御鈴 そうざんすねえ。でも三着はないし……

急に、音楽が聞こえた。テープによるバツハである。

御鈴 そうだ。ちょっと、恐れ入りますけど、みなさん、手をおかしんなくて。

御鈴はピアノに行き、

御鈴 ピアノをそっち移していただきたいの。

こっちへですか。

御鈴 そう。床の間の方へ。重いけど、五人がかりなら……（動かしながら）この奥の納戸に  
ね……

どうなさるの、先生。

ピアノが床の間を塞ぐ位置に移った。

ずい分、ほこり。

御鈴 ときどき調律はしますけど、あたしが生まれる前からあったみたいですよ。ここに。

襖を開けようとするが開かない。

女たちが手伝っても開かない。



あ、鍵かかるようになってます、先生。

御鈴 鍵？ 母、もう起きたかしら。

ええ、ついさっき、ここでピアノ占いなすったばかり。

御鈴は上手の御簾を開けて叫んだ。

御鈴 おかあさま、おかあさま。玄書院の鍵、御存知ない。おかあさま……

雪月花のお客様らしいですよ、先生。

御鈴 え？

山口の靴を見せる。

御鈴 へえ……おかあさま、ちょっといらして。聞こえないかな。あの奥にね、とても素適な体操着がたくさんしまつてある筈なの。

参吉である。

御鈴 あ、参ちゃん、おかあさまは？

参吉 お食事中でございますが。

御鈴 あ、あんたの方が知ってるわね、あすこの納戸の鍵知ってるでしょ、鍵？

参吉は改めてピアノの移動を知り、おどろいた。

参吉 いったい、これは、どういうことで……誰方がこんなことを。

御鈴 あたしがよ。どうかして。

参吉 な、なんのためにでございますか。

御鈴 あけるためよ、納戸を。

参吉 あけてどうなさいますのか。

御鈴 あけてお祖父さまの長持ちを出すのよ。

参吉 いけないです、お嬢さま。あの納戸はいけません。

御鈴 なぜ……どうして。

参吉 はい。

御鈴 好奇心がわくじゃない、そんなに反対されると。

参吉 はい……

御鈴 そのわけ次第ではあけないでおいでもいいけど。ねえ、なぜなの、参ちゃん。なぜなの。  
参吉 恐ろしいのです。

恐ろしいなら、なお見たいわねえ。

ほんと。

参ちゃん、見せて。

見せて。

御鈴 (やさしく) 参ちゃん……か、ぎ。……(きつく) 参吉、鍵。

参吉 お嬢さま。今のはあなた様のお声でございましょうか……わたしは当年とって七十八歳。  
まあ。

若いわあ？

参吉 ダルメイダ様、兵部様、そして御鈴様、三代にお仕えして六十年、ただひたすらにお傍  
近くに居らせていただくのがわしの、唯一の生甲斐とでも申しましょう。が、やはり、  
少し生きすぎたようでござります。初めてそのようなお声をききました。  
御鈴 ごめんね、参ちゃん、つい声を立てて。

参吉 ありがとうございます。(腰の手拭で眼を拭いた)

御鈴は眼を外らして廊下の方へ行く。「あんだ泣くの、初めてみた」

参吉

お祖父様のダルメイダ様が沼津から清水へかけて、貝塚の発掘で東京からおいでになりました。まして、あれは明治の三十七年、乃木將軍が旅順を攻めあぐんでおられました。お祖父様は本当のお生れは露西亜でニコライ・ステパノフスキーと申されますが、そんなわけです。敵国でございますからダルメイダ言う伊太利亜人になられ、とうとう日本人になつてしまわれたのですからそんなことはどうでもよろしいわけで、それはもう日本人よりも御立派な日本人で、言葉など誰がきいても異国の人とは思われません。ただ、字は、字だけはどうしても子供のようで、ですからわしがときには、おっしゃられることを巻紙に筆で書かされたものでござります。その清水の発掘のときに、医者をして居りましたわしの親爺がダルメイダ様を診察申し上げたのを機縁に友達になり、小倅であつたわしが、発掘のお手伝いをさせられています。うちのまにか御家来のようになつてしまつたようなわけです。とてやさしいお方。奥様のお雪様もお美しいいお方で、あなたさまとそっくりで、はい、それではごめん下さりませ。

御鈴

ちよつとちよつと。じじばばの話じゃないの。鍵、鍵が欲しいの。その腰にぶら下がつてるもの。ね、かしてよ。

参吉

恐れ入りますがお嬢さま、参吉、一生のお願いにござります。あすこは開かずの間にしておいて下さいまし。恐ろしいのでござります。

御鈴 だから何が恐ろしいのってきいてるじゃないの。ちつとはあたし知ってるわ。骸骨がた

くさんしまつてあるでしょう。

参吉 や、いかにして、それを。

御鈴 もう二十年以上になるわ、あたしが十六だったかしら、召集されたかと思うと半年もた

たないうちに、骨と皮みたいに痩せ細ったお父様が陸軍病院から搬ばれていらしたわね。

それから二日目にお父様おなくなりになったその朝、鼓と笛とを持ってこいてあなたに言いつけて、あなた、あの納戸を開けて鼓を出したでしょう。

参吉 はい。

御鈴 あたし、そのとき、廊下からそつとのぞいていたら、しゃがんでごそごそしてるあなた

の上に、眼も、鼻も、唇もないしやれこうべが、少なくとも、二つ、こっちをにらんでたわ。

参吉 ああ！

まあ！

骨が、人骨が。

兵部様の。

ちがう、ちがうって。

御鈴 ですけど、お祖父様の学術用だろうってことはすぐ思いあたったし、

参吉 はい、その通りにちがいがござりません。あれはお祖父様が、わしもお伴しましたが、京都の山奥の小さなお寺で発掘されました。

御鈴 やっぱりね。

参吉 しかし、しかしてござります。それはもう、全くもう、……由緒の深い、歴史的なお方の頭でござりますので。

御鈴 だけど何百年もたってるんでしようし、あたしはもうそんなもの怖くない、却ってデザインの参考になるかもしれないよ。とても抽象的ですが。参ちゃん、あなた、男のくせに怖いのかしら。

参吉 お言葉を返すようですが、わしはわしが恐ろしいのでござります。

御鈴 え？　なんでですって。

参吉 あの部屋はわしの玉手箱。わしはごらんのように既に白髪の浦島でござりますが、こうなりましたらごめん蒙って述べさせていただきます。もしかりに……

御鈴 かりに、なあに？

参吉 浦島が尋常に年をとりました、爺の白髪頭の浦島で故里に辿り着き、さて、玉手箱を開けたといたしましたら、そういたしましたらいかでござりましょう。

御鈴 そうね。禿げ頭になるわ、きつと。は、は、は……

四人は大笑い。

御鈴 さ、かして。それだけ演説したらいいでしょ。

参吉は非常に悲しそうに眼をしばたいていたが、仕方なく、鍵の束を外し、掌中の珠のようにしげしげと見た。

待ちきれなくてそれを奪いとり、納戸に突進する御鈴。それをとりにこむ四人の女。参吉は両の拳を握り合わせ、低く切なく「神様」とお願いして、しおしおと退った。  
やがて

### 3の巻

御鈴を除いて誰もいない。

御鈴は板の間の円の真ん中に据えられた長持ちの上にお尻をのっけ、脚をくんで、長い巻紙をよむのに夢中。この長持ちは祖父が露西亜から持ってきたもの。巻紙は彼が参吉に書かせた祖母宛の恋文であった。流れるような漢字交じりの平仮名。

さて、長持ちのまわりには、ここから引っ張り出したと見え、長いスカートの十九世紀半頃の欧風の衣裳が散らかり、はみ出した。

久保がそつと上手の鬨際に現われた。顎を吊った三角布はそのまま。振り返って手招きし、そつと足を抜きながら、御鈴のうしろにまわる。招かれてきた三人の女、寝帽子をかぶり、ピエロの晴れ着のようなパジャマを着て、……真っ白や花模様やピンクの地に縞の入ったのや……

御鈴は既に気がついて、四人にとりかこまれると、

御鈴 「お前さま御ん指のさきに、たださきに少しはかり私の指さはり申し候ひしときはさな

がらに……さながらに……」なんだろう、これ……

雪じゃない。上が雨だし。

そうかと思っただけど、棒が一つよけいですもの。

ああ、かみなりよ、きつと。

雪と雷じゃ大ちがい。

御鈴 いえ、それだとわかります。ええと、さながらに雷にうたれし心地にて御座候。

なんです、先生、これ。

御鈴 このお櫃の中に入ってますの。ほら、こんな。



古びた封筒の束だ。

御鈴 おじいちゃまの懸想文、ラブレターですの、ここのおばあちやまの、そのまたおばあち

やまにお出しになった。初め親たちは大反対でしたってことよ。

今から五六十年も昔だもの。

へえ！

家宝もんね。

御鈴 たばこ屋の看板娘だったらしいんです。それで、のみもしない煙草を買って、お釣をも

らったとき、

ちよつとこう触れたんですね。指の先が。

御鈴 そう。「お前様の冷き御ん指、熱き火箸の如くあか心を鋭く貫き、そのままその場に相

果てし想に候、相果て候はばかかる苦しきも招かさりしものを。」

うわあ。

異人さんだって、恋の悩みは東西同じね。

御鈴 「御言葉をたまはれかし。それも叶ひ申さすば、せめてほほえみの御ん眼を向けたまへ。

われも許され候はば、万金の償も惜しからず、そのほほえみをあがない候ひて、わが胸

板に刻み、とことはの悦とこそ致すべく候。」

うわあ。よっぽど厚い胸板だ。

あたしは恋なんてしらないけどさ。

いい年をした女が、わくわくして他人のラブレター……

だってロマンチックなもの、ね、先生。

いくらロマンチックでもさ、あすこの骸骨拝見したら、しちりけっばいだ。

おうよそ、そのいみは感じてわかるんだけど、これが試験問題に出ないかしら。(これは  
柊さんだろう)しちりけっばい!

上手の鬨際に、僧形とも唐風ともつかぬ装いで、黒い頭巾のようなものをかむった  
男が、手を拱いて立った。今時の若い者は忍者だといふかもしれないが、儒者である。  
まだ日も暮れぬにお化けが出た。

儒者 「けっばい」にては候わず。結界です。七里結界、七里結界、魔障の者入る可らずにて  
候。

納戸に消えたが、これは見物に見せ聞かせるためで、女たちに聞かれては困る。

御鈴　　ロマンはよして現実に戻りましょう。(両手を打って) まあ、みなさま、ごりっばだわ。

決死隊ですよ、決死隊。

御鈴　　そのお覚悟なら一週間で四キロ、贅肉をとってさしあげますわ。初めはね歩くことから

ね。(闖際に行き) 参ちゃん、お願い。…そのね、白い輪の上にお立ちになってごらん遊ばせ、間隔をとってね。別に音楽に合わせて下さらなくてもよろしいの。輪から外れないようにお気をおつけになって。はい、一、二、一、二…左、右…

お一二、お一二…

まっすぐ。方向音痴。

真剣だから笑っちゃいけない。でなければ眼をつぶって、バツハを聞くだけでいい。

御鈴　　お手をお振りにならないで…無念無想と参りましょう…そうすれば、板の間を歩い

ているのではなく、雲の上をふわあっと浮いて進んでるような心持ちになりましたよ。一、二、一、二…下界の音もいつの間にかかすかになり聞こえなくなる…ヨガとはですね、メデイタション、冥想のことでございます。いえ、別にお眼めつぶる必要はございません…誰方ですか、にやにや笑ってらっしゃるのは…そおして、よろしいか、

筋肉の力を外から内へ、内から外へ、平均して廻るように……身体の重みと地球の引力とが初めのうちは喧嘩しますわね。ですから、かがとと板の間とがどたどたばたばた鳴り合うでしょう。飛行機なら着陸失敗大破炎上ってところ。

じゃ、土踏まずで胴体着陸といくか。

御鈴  
はは……そうね。

こうやりやいいんでしょう。つまり。

終さんと佐田さんが能舞台の歩き方で歩いてみせた。

御鈴  
お狂言の太郎冠者みたい。

参吉先生に教わったんですよ。

御鈴  
なるほど。でもお能はね、將軍や貴族に見せたから何としてもへり下ってますね。ヨガ

はそんな遠慮はいりませんの。もっと開放的で、ナチュラルで、調和的で……一、二、

一、二。

幼稚園だ。

御鈴  
そうでございます。幼稚園から大学まで、四キロ。

しばしつづけて、

御鈴 はい止まれ。次は（自分でやってみせた。腹這い）これ。……そう。両手、両脚は真っ

すぐおのびしになって。

丘泳ぎだ。

御鈴 お腹の筋肉の運動。真っすぐにのびした両手両脚をそのまま上へ上げます。お腹を中心にして、弓なりにそらします。顔をお上げになって。

ああ苦しい。

せつなく候。

御鈴 そう、苦しい。筋肉がたるんで、ぶよぶよしているから苦しい。さ、アレエ、アレエ……

……息をためて、ためて、静かあに……

これはそう簡単には実行はできない。

和服に着替えた月が、花子をつれて入った。話しかけたので、ヨガの女たちは、へたばったまま大きな息を吐く。

月 ねえ、鈴ちゃん、この人、花さんをね。あら……（近寄って）それ、パパのお櫃じゃな

い。そうだわ。(納戸を見て)開けたの、あすこ。あたしもね、ときには風を入れて、虫干した方がいいと思ってました。昔のあたしたちの先祖の魂が中からふわあつと匂うように立ち昇ったでしょう。見たかったのに、それ。あ、これママのね。なつかしいわ。あたしはね、今とちがってね、あいの子だっていうのでだいぶ苛められたし、先祖なんてそう特に有難いとも思っていないんですけど、でもね、あれあすこのしやれこうべ、大きい方が殿様で、少し小さい方が奥方。実はこれ兵部家がね、京都にあつたお墓をパパに売ったのよ、莫大なお金で。内緒よ、これ。

御鈴 へえ！ 道理で参ちゃん……

月 だからお前さんの血にはあの骸骨の血が流れているかもしれないね。殿様のは脳軟化症、奥方方には齒槽膿漏の跡があるそうよ。それでね鈴ちゃん、今ね、花さんと相談したんだけどね、花さんこの家であたしたちと一緒に生活することに決めましたよ。それというのも、西村明太から兵部一郎につづく伝統を絶やさないためにね。雪、月、花とね。

花 よろしく願います。

御鈴 え？ いったい、この方？ ああ……おかあさまの占いにかかった方！

月 なんです。かかったとは。それに第一、参ちゃんも年でしょ、そういつまでも坂の上まで卵買いに、下までお豆腐買いに行ってもらえないでしょう。長いお廊下の拭き掃除、

広いお庭の落葉掻き、

御鈴

あら、落葉集めてお芋焼くの、あたくし大好きだわ。

月 だから肥るんです。屋根のぺんぺん草を抜くんだって、参ちゃんはもう無理とは思わない。高い梯子を上ってさ。

オートバイがまた爆烈通過。

御鈴

ですけどねえ、おばあさま、この間、あれほど申し上げたでしょ。この玄書院はおそかれ早かれ、この世から消えていきますよって。買い手があるんですから。梯子なんか、もういりませんの。

ヨガ組は何事かと半身を起こした。

月

あらそう！（賛成してくれないので機嫌が悪い）じゃ、ヘリコプターでも使って空から抜こうってわけ。はは、これはまた一段と面白い。

御鈴

花さん、ですか。母はああ申しますけどね、打ち明けたところ、あたしの家では他人様に手伝っていたかどうか。母はああ申しますけどね、打ち明けたところ、あたしの家では他人様に手伝っていたかどうか。母はああ申しますけどね、打ち明けたところ、あたしの家では他人様に手伝っていたかどうか。（悲しそうであった）いらしていただ

くにもお金がないんです。

あなた、この人がお嫌いなものね、年もそうちがわれないし、お互いに反撥するんでしょ、子供ね、あなたもほんとに。

（小声で）あら、まちっと若っかですよ。うち、金なんていらんどです。

そうもいきません。六千円、五千円ぐらいは出しますよ。ね、鈴ちゃん、あたくしが何でピアノ占いしてるか御存知？ あなた少しあたくしをばかにしておいでだけど、これでもあたし、この家のために働いているんです。あなたがそうやって変な体操したり、下着や上着のデザインをしたり、宝石の鑑定をしたり、兵部は眼が高かったからね、血は争えないものね。あ、それから子供たちにピアノを教えたり、八面六臂の奮闘をしてらっしゃるの、あたしがだまって見ているとでも思っていないさるのね。そうじゃない。あたしはちゃんと占い料をいただきます。現にこの人から二千五百円もらったしね。少し値上げしたの。

御鈴

もういいわ、おかあさま。お好きなようになすって。ただ申し上げときますけど、……（ああ、言っても仕様がな、この母親にかかっちゃ）邪魔だから、あっちいらしてて。

現に月は御鈴の言葉なんか聞いてないで、花に何か言っていた



月　ね、鈴ちゃん。あなたの普段着で何かないかしら、花さん、毛糸のセーターとスカート

しか持ってきてないんだって。

御鈴　そうねえ……あ、これでもお着になったら、花ですもの。この前の人みたいに、三日で行っちゃうでしょう。

櫃からはみ出したのを引っ張り出し、それを花子の前にかけて、

月　勿体なかないですか。

御鈴　幽雅よ。長かったらお詰めになるといいわ。さ、次はと、

もう月花のことは無視した。二人は去った。嬉しそうに。

御鈴　中抜きで、一番ためになっておつかしい連華開花に参りましょう。終りの締めくくりの

ポーズ。一番美しい、完成したポーズですわ。

ほらきた。

仏さま、仏さま。

御鈴　そのまま、そのまま正座なさないで。

このままでいいんだよ、このままで。

楽ちんだね、いちばん。

仏教の坐禅とおまちがえにならないで。

御鈴

自ら手本を示す。

先ず胡座あぐらを組み、両脚の土踏まずをお腹の前でぴたりとくっつけ合わせ、その下に、指を組み合わせた両手を差し入れた。しかも背中を丸めず、かがまないから、すらっと開花しにくいのである。

へえ！

合掌して、そいつを下に入れるんですね。

わけない、わけない。

(笑いながら) さ、どうぞ。

御鈴

無様な格好をわざと見物の前に披露するのが私の目的だと誤解されると困る。配役された不運な人たちが早速練習を開始して、初日までに、その無様さから見事さまでを一通りやって見せられるようになるのが望ましいのである。だから最初は、う

しるにひっくり返ったり、うんうんどっこいしよとひとさわぎ、自分でも面白がったさわぎが段々鎮まって、どうやら恰好だけはヨガになった。手伝って指導していた御鈴自身も両眼を閉じて無我の境に入った。以下は皆が眼をつぶったままの囁くようなやさしい会話。

せんせ。

せんせ。

御鈴  
なあに。

魂ごっこしない

御鈴  
なあに。

ほら、魂が肉体から離れてね。

遊ぶじゃない。

魂ごっこよ

御鈴  
してもいいわ。

いいからだしてるなあ。せんせえ。

きれいなお尻だなあ。

御鈴  
そう。ありがとう。（向こうも本気ではない、こっちも然り）

魂もきれいだわ、きっと。

御鈴

そうかしら。

ほら、先生の魂が離れたよ。今。ふわふわあっと飛んで。

どこいくのかしら。

どこいくのかしら。

わかってるわ。

どこさ。

旦那のどこ。

でなけりや愛人。

御鈴

あたしには旦那も愛人もいませんよ。

うそつけ。このめろう。

どっかにかくしてんだろ。

白状しろよ、誰にも言わねえから。

死んじゃったのよ。

あんなこと。

咲太郎の父親はいったい誰だよ。

どこの何てんだよ。

どこの馬の骨だよ、牛の骨だよ。

なぜ、その男の名前を名乗らねえのかよ。

婚姻届が出てねえな。

御鈴 魂は自由に飛んで、戸籍だの何だの、この世の鎖にしばられないわ。もうだまって。

しばらくして、また、

せんせ。

せんせ。

あのねえ。

お屋敷をお売りになりますの。

もしお売りになるのなら、

買いたいの、あたくし、

あたくしに売って、

あたくしに売って、

魂って、ほんとに美しいわ。

一同、うふふ……と笑った。

上手の襖から、西村明太（四十七歳現在）と雪（二十七歳現在）とが現われた。

明太は、ぴったりした、しかし裾の長い背広、チョッキ、細身のズボン。頬髯。土耳古風の浅い帽子。シルクハットを持つ。雪は西洋十九世紀末の洋装。但し、束髪。結婚して二、三年たったころと思われる。（既に月は生まれていた）

明太 雪。どうたいちやくりく、とは何だね。

雪 さあ、知りませんわ。

明太 雪。

雪 はい。

明太 ラクチンとはなんだね。

雪 え？

明太 ラ、ク、チ、ン。

雪 さあ、知らないわ。

明太 あの方<sup>かた</sup>たちはたぶん、普通の家庭の奥様ではないのだろうね。

雪 なぜですの。

明太 お茶屋のおかみさんとか、なにか水商売の奥さまだね。

雪 (笑って) いいえ。

明太 おや！

雪 女はね、あんまり旦那に甘やかされますとね、ああいう風になるわ。

明太 雪も？

雪 (可愛く首をかしげて) うふん！

明太 (それがいとしくてたまらない) 雪！

雪の肩を抱きよせ、その髪をやさしく撫で、

明太 ゆき！ ゆき！

ゆきやいとしき

ほろほるとちりしき

くろきつちうるほい

あたたかきはるをさそい

はるかなるいのち

やよ、ふきあけよ

とわに、とわによ

ゆき！

ゆき  
うれしい！

明太  
はるかなるいのち

やよ、ふきあけよ

ゆき！

ゆき  
とわにね、とわに。

二人は抱き合いながら納戸に消えた。

袴の裾をはしおった参吉が、廊下の雑巾がけて現われ、一往復して、息をつきながら中を眺めた。眼にとまった巻紙。そつと近寄り、濡れた手を気にしながら、つまんで……シヨックを受けてよろめきながら廊下に出て、

参吉  
わしの箱があいた……

西部劇に出てくる貴婦人のような装いになった花子が、お盆にお茶を五つのせて現われた。それはダルメイダに連れ添った雪のそれに似ている。どこにおこうかと迷ったが、ピアノの傍卓を見つけて、そこに運んだ。蓋をあけて、ピアノの鍵を、自



分の運命の鍵を探して一つ叩いた。「イー」と歌う。それを合図のように、四人の女たちはゆるやかに横に倒れ、両手は組んだまま。

もうあかん。

動けません。

おなかへったあ。

なんとかしておくれ。手がくっついちゃった。

あそこにお茶のありますけん。

しかし四人はお茶ぐらいでは動かない。山口はそのまま、ゆっくりと御簾から去る。

参吉

ゆき！

わが眼を疑いながら茫然と見送った。その唇から、かすかに洩れる恋の告白は枯れて無表情に近い。

参吉

お前様の冷き御ん指、熱き火箸の如く……あか心を鋭く貫き、そのままその場に相果て

し想に候……相果て候はばかかる苦しきも……かかる苦しきも招かさりしものを……  
血が通うとらん。

御鈴は身を起こし、櫃の上の巻紙を手にとった。

参吉

御言葉をたまはれかし。それも叶い申さずば、せめてほほえみの御眼を向けさせたまえ。  
ああ、なつとらん。

そのままそこに腰を下ろした。

少し暗くなりかけていた。

参吉

われも許さるれば、万金の価も惜しからず、そのほほえみをあがない候いて……わが胸  
板に刻み、とことわの……とことわの悦とこそ……これが……これが懸想文といえよう  
か！

御鈴、巻紙を長く曳きずりながら傍により、いささかなまめかしく、

御鈴 無骨だけど可愛いわ。お祖父様って、やっぱり情熱家で直情家で、それでいて女性を愛し得る優しい男でしたのね。ちようど、参ちゃん、あなたのように。

参吉 (まだ、ぼんやりしながら) なんとおっしゃられた。

御鈴 何故ってね参ちゃん、参吉さん、この上手な字があなたの字なら、この文章もあなたの文章でしよう、あなたの思想、あなたの感情でしよう。

参吉 この手紙、恋い慕う女にあてた文、ふみさも思い悩んでいるかのように書かれておりまして、血が通うてはおりません。表面うわべだけでござります。これをさも美しい言葉のように思つて筆をとったわしが恥ずかしい。このいつわりの恋文はあの開かずの納戸の奥に永遠にかくれて、せめてわしが生きておる間は誰の眼にもさらされてはならぬ代物でした。本来、わしという男は女を愛するなどという優しい気持ちは露ほども持つてはおりませんのです。

御鈴 参ちゃん！

参吉 資格の無い男でござります。自分を甘やかした自惚れの姿がここにはある。だからこそわしはさきほど、恐ろしいと申し上げたのです。これはおやさしい御立派なダルメイダ様の文ではなく、我欲にうすよごれた者がしたためたいやな文でござります。

御鈴 まあ。それどころかとても純情無汚ですよ、参吉さん。

参吉 とんでもない。身の程知らぬ者の思い上がり。さ、どうぞもう、そんなものお仕舞い下

さいまし。どうぞ。

御鈴 どうしてそんなに自分を卑しめ、さいなまねばなりませんの。あなたが何と強弁しよう

と、参ちゃんがお雪様を慕っていた事実は事実。

参吉 ですからそれはわしの、あさましい幻だったのでござりますと、ただ今、あれほどはっ

きり……

御鈴 ですが、その幻を今でもまだ見つけているんでしょう、そうでしょう。

参吉 ……

御鈴 それはじゃ、どういうわけ。さ、顔をそむけないで、あたしをはっきり見てごらん。ね、ね。

参吉は遂に起ち上がり、「御めん」と飛鳥の如く廊下を奥に逃げ去った。

御鈴の持った白い巻紙が高く空中に舞った。気持ちよさそうに笑って放り上げたの

だ。

やがて

四人の女たちが額を集めるようにして、巻紙を読み、御鈴は障子に凭れ、庭に向かい、ミ  
ネトシカの湖畔を口ずさむ。

立花さん　これがあの参ちゃんの字。

柗さん　あんまり達筆で、あたしなんか読めやしない。お尻痛くない、あなた。

久保さん　候文ってのちよっと乙ね。

立花さん　古臭いじゃない。あたしも痛い。

佐田さん　でもあんた、このラブレターの意味わかん。

立花さん　そりゃわかるさ。

柗さん　ラブレターに意味なんてあるもんか。

久保さん　だから感じてさ。運動したあとっていい気持ちね。

柗さん　相果て候わばって何だっけ。

佐田さん　仕様がねえな、この教育ママ。

久保さん　相果て？　きまつてるじゃない、お互いに差しちがえて死ぬことよ。

佐田さん　そう？　でも刀なんて持ってないじゃん、考古学者だもん。

柗さん　相果ての相だから、互いにこう。

久保さん　要するにさ、死ぬほど想ってますってことでしょ。

立花さん　ひと口に惚れてますってこと。異人さんにはそう言えないのよ、きっと。少し品がないみたいだから。

佐田さん　ちがうちがう、これはね、日本人である参吉さんが書いたの、代わりに。

柊さん　（ぷっと吹き出した）

久保さん　なら、死ぬほど想ってますってこと、異人さんは何て言うんだろ。

佐田さん　そりゃ……焦れ死に、よ。

久保さん　じゃ、あたしは、僕はあなたを焦れ死に……ます？

柊さん　愛してますよ、簡単に。

立花さん　味がないわね。「愛してます」

久保さん　好き……じゃ弱いしな。

佐田さん　もっと、日本的な言葉ないかしら。

柊さん　日本的って。

佐田さん　もっとこうムードがあっせき。

立花さん　じゃ、惚れるだ、やっぱり。

佐田さん　下品だって言ったじゃない、自分で。

久保さん　日本的ってムード的ってこと？

立花さん　フィーリングがあっせき。

柗さん あらそうじゃないと思うわ。

がやがや言いながら四人は障子際のスツールに腰を下した。腰や膝をさすりながら。御鈴がお茶のお盆を持ってきたので、「おそれいります」

巡査が火縄銃片手にどかどかと廊下から。すぐつづいて咲太郎と友人の梶君。二人共、大学生だが、ネクタイ無しの背広。

巡査 失礼します。兵部さんの家の方は居られますか。

御鈴 はあ……何でございましょう。

巡査 奥さんですか。御主人にお目にかかりたいですが。

御鈴 あのう。

巡査 玄書院というんですか。化物屋敷って噂にきいて、いや失礼しました。お広いお部屋ですな。お手入れがたいへんでございましょう。御不在でしたら……（女四人を眺めた）主人なら、そこに立って居りますわ。（咲太郎のことだ）

巡査 は？ はは……いやあ……

女たち、くすくす……

巡查 ああ、上州屋の奥さん。おや、ローヤル館の奥さんも。へえ、皆さん、いったい……

女たちはあわてて、急いで、廊下の奥へ逃げ去った。(開幕から長々と御苦労さま。ちよつと休んで下さい)

御鈴 あ、その鉄砲は。

巡查 何もしませんよ、僕は、逃げんでもいいですよ。

咲太郎 おれたちだって何にもしねえよ、な。

梶君 そうなんです、ちよつと鑑定してもらいに行っただけなんですよ、小母さん。そしたら

このお巡りがやってきて、頭っから罪人扱いにしやがって。

巡查 おばさん！ ああ、そうですが、いやあ、はは……、実はですね、奥さん。

この間、御鈴は床の間に行き、火縄銃がないことを確かめてきた。

咲太郎 もういいよ、帰ってよ、お巡りさん。

梶君 帰れよ、いいかげんに。



咲太郎 身許がわかったからいいじゃない。

御鈴 うちのね、その鉄砲。

梶君 帰れよ、早く。

巡查 鉄砲不法所持はあれ以来、特に青少年に対しては厳しく取締りを実行しておりますんでね。許可書お持ちですかとお聞きすると、持ってるとか持ってねえとか、態度が曖昧で、初めは偽名を使っておられましたし。

咲太郎 迷惑かけたくねえからさ。

巡查 それならいっそ御同行願った方がいいと思って来たようなわけで、質屋から。

御鈴 質屋から。なるほどね。

梶君 うそつけ。その前には署まで来い。三年ぐらい打ちこんでやると言ったじゃねえか。

咲太郎 そうだよ。許可書だかお墨付だか、あったら見せつけてやってよ、母さん。

巡查 火縄銃の許可書もあるんですがね。私もね、最初から素直に事情を話して、金がいるならいるって申し立ててくれれば。

御鈴 恥ずかしいこと。

巡查 そうすればなにも、規則を楯に杓子定規な物の言い方はせんのですよ。君らはとかく僕らの顔を見れば、お巡り帰れとすぐ言いたがるけどね。

御鈴 (高く) 参ちゃん……お紅茶。

巡査

いやいや、かまわないで下さい。(銃を咲太郎に返した)あのう、奥さんが子供さんたちにはピアノを教えていられると聞いてますが、それでこんなこと僭越かもしれませんが。

御鈴

はい。

巡査

実は私の家にも四つになる娘が居りまして、ピアノを習いたいなどと柄にもないことを口走るもんで。

御鈴

あらそれはおたのしみですわ。

巡査

よろしいでしょうか、こちらにつれてきても。

御鈴

どうぞ、どうぞ

巡査

は。どうも。あれですな、子供さんの躰ってものはむずかしいもんで、うちの娘も「はい」の代わりに「うん」……「手を洗ったかい」「うん洗ったよ」こうですよ。これでは困ると思いますが、だいたい「うん」などという日本語があるんですかね。しかし子供には社会の影響が強いですからね。それにまた、はは……親爺の権威も地に落ちましたし、いや、お察しします。

何がお察ししますだか、巡査は帰った。御鈴、送っていく。

「咲太郎、あなたもお送りしなさい」「はい」。

咲太郎もついていく。根はおとなしい子である。梶君はひとり残って、おいていっ

た火縄銃をいじっている。

床の間のドンデン返しから、はたきと布巾とを持った参吉、箒を持った花子が現われた。「へえ、こんげんとけにも通路のあつとですか」。参吉は先ず、ピアノを元の方へ動かそうとする。花子は床の間の昔の武器など珍しがる。梶君、気がついて参吉に手伝った。

梶君

うわっ。骸骨だ。変なもの集めてんだな、この家は。

花子もかけよった。

参吉は、鎧を順々に板の間におろし、はたきをかけ、布巾で磨き上げる。

「参ちゃん、参ちゃん」と呼びながら、月が出てきた。

月

あ、参ちゃん、今夜のお菜なあに。あたくし、海鼠が喰べたいんだけど。あ、あなた方、（納戸の方に行った）考古学わかる。あの壺が縄文、隣が弥生。あの埴輪はね、群馬から出たの。あのお面は、ボルネオだったかな。それからね、あの床の間の甲冑はね、この家の守護神。つまり魔除の役なの。東からきても西からきても防いでくれるってわけ。ふふん！ あたしはそんなもの信じないけどね。

「どうぞどうぞ」と言いながら、御鈴が速水と名乗る男を伴ってきた。つづいて咲太郎。

御鈴　みなさーん、いらっしやいましたわよ、今日の司会者の方が。

速水は御鈴より少し年長。美男子であった。黒い服、つねに喪中の男のようだ。

御鈴　おかあさま、こちら速水さん。……お忘れになった？

月　ええ？

御鈴　ほら、その頃、大学生でらした。

月　その頃っていうと、

御鈴　あたしがまだ女学校の四年だった頃、家庭教師でいらした。

月　あたくしもだいぶ物覚えが悪くなりましたもんで……それで、あたくしのピアノ占いを  
おたのみにいらしたんですね。御鈴のお知り合いだから、千五百円でみて差し上げるわ。

御鈴　ちがうのよ。

速水　はは……いずれみていただきます。

御鈴　ちがうのよ、おかあさま、速水氏はね、今日の司会のためにいらしたの。同時にお子さまに会うためにもいらしたの。

月　　？

速水　いや、司会なんて柄ではありませんが、御鈴さん、今、あなた何か別のこともおっしゃったようですが。

御鈴　ええ、あなたのお子さんに会うためになって。

速水　僕の子供なら、目黒の僕の家でエレキかなんかデケデケやってる筈ですが。

御鈴　ええ、でも、この家にも、ひとり居ましてよ。

速水　え。何のことがよくわかりませんが。……

御鈴　ほら、その鼠の背広の方の若者ですわ。咲太郎、とてもいい名前でございます。

速水　御冗談。どうも、いや、全く……

御鈴　ほほ……でもね、親子が手を取り合って名乗り合うとか、あたしがあなたをパパとよんだり、そんなつもりは毛頭ありませんの。ですからなんにも御心配なくね。

月　　ひとり合点をたのしむのはどうですかね。

咲太郎　あのう、親爺はですすね、僕が生まれる前に、アメリカの潜水艦にやられて台湾沖で死んでる筈なんです。

月　　そう。この子の父親はってきくと、あなたの返事はきまってそうでした。だけど、それ

が速水さんだとは……名前も何んにも教えてくれないんだもの。あ、あなた、生きて、そこにいるのね。

御鈴  
ごめんなさい、おかあさん。

月  
ああ！（急に泣き始めた）

四人の奥さんたち、最初の服装に戻り、あわてて廊下から駆けつけた。まだ帯の途中の者も。

いそがしいったらありやしない、どんな人かしら。

ほんとよ、休憩だなんて気休め言ってさ。

勝手なもんね、？って、全く。（？は作者のことらしい）

こんど会ったらのしちやおう。

月  
（泣いて）今さらどうなさろうというの速水さん。御鈴が申しますように、あなたがそうだとしましたら……咲太郎や御鈴をこのあたくしからさらっていこうってなさるんですね。

速水  
ねえ、お母さん、僕には既にれっきとした女房と子供が三人もいるんですよ。

月  
まあ！では、あなたは法律上のそして道徳上の罪人ね。

速水 罪人。

月 そうじゃありませんか。二重結婚は詐偽罪です。

御鈴 おかあさま、速水さんに責任はないのよ。事實は親と子であっても。

月 いいえ、あります。父無し子を生んだ娘の母が、どんなに心を悩ましたか、どんなに冷たい世間の眼にさらされたか、あなたにはわかりではありますまい。女主だからだしがないなどの侮辱にどんなに耐えてきたか。

速水 ごもつともです。少しわかってきましたが、思えばこれも戦争の傷、でなければ後遺症かもしれませんね。それが二十年たって突然現われたのだ。

月 え？ 戦争のせいになればすむっていうんですか。何事もなかったことになるとおっしゃるんですか。

速水 いや、そうではありません。戦争の「せ」の字も知らない若い人が、どんどんふえていく今、戦争の禍や悲しさや愚かしさや、あらゆる害悪を説き訴え、平和の有難さを教えるようにすること自体がもう無意味に近いかもしれないのですから。戦争の犠牲などといったことももう通用しませんよ。（女たちに）皆さんにしても、空襲でひどい目にあったりしたことなど、もうお忘れでしょう。でなければ忘れようとしていられるのだ。

月 それは早合点というものです。昔、あなたが一枚の赤紙で戦場に連れていかれたように、現に今、あすこにいる二人の青年が兵隊になるかもしれない。そう考えるだけでも恐ろ

しいじゃない。日本は世界中で徴兵制度をしいていない数少ない国の一つだったこと、こんな有難いことはありませんってこと、二十年たとうが百年たとうが永久に訴えてわからせねばなりません。

速水

その通りです。しかし、今の若い者はなつとらん。昔みたいに二十歳になったら兵隊にとって筋金ヤキを入れ、しごいた方がいいというような意見もありますね。すべてはじわじわと昔に帰って行ってるのではないでしょう。その例をあげればたくさんあります。そんなとき、ただ平和、平和という反戦の旗をむきになってかかげても、却って逆効果かもしれないのです。全くもう、永世の中立なんて白昼の夢にすぎないことを、恐らく今の青年達は理屈でなしに、肌で感じているのでしょう。だから僕は今日は「国語」の話をしにきたので、戦争の話をしにきたのではないのです。しかし、やはり自分のこととなると、ついね……咲太郎君、君はいくつ？

咲太郎

二十一。

「海行かば」の曲。突如。

速水

そう。二十一ねえ……僕は二十二だったかなあ。既にもう日本の負け戦シベリヤの色が濃く、食べるものも少なくなり、国民は不安な無力感と絶望すまいとする空しい緊張で疲れ果て



ようとするころ、とうとう僕にも召集令状がきた。明日、入営という前の晩、このお宅で、どこから集めてこられたのか、当時手に入れにくかった牛肉で鋤焼をたべさせて下さいましたね、そして一合の酒。あの味、忘れられません。

月 参ちゃん苦勞して探してくれたんです。

速水 どうも。おわかれの最後の晩餐！ いつもなら、僕はすぐお暇するのですが、その晩は、どちらから誘うともなく庭に出た。

御鈴 お庭のお池のまわりを、だまって、ふたりで歩いたわ。同じところをなんどまわったろ

う。その日まで、あたしたちは先生と生徒というだけで、なんでもなかったのに、松の樹の下の芝生の上につかれて坐っていると、戦いくさのために死に行く男がすぐ傍に居て、死という無限に直面している底知れぬ空虚。それが生々しく、ひたひたとあたしのからだに波打つようなの。悲しいというより嬉しいの。何故って、その空虚を埋める役はあたしだ、死を打ち負かすのはこのあたしだと気づいたからなの。星空が急にあたしの目の前にひろがり、あたしがある中に吸いこまれたのか、それをあたしが吸いこってしまったのか、ぼうつとなにもかもわからなくなった……どれほどの時がたったろう、夜露に濡れた背中が冷たくて眼が醒めた……だあれもいなかった……それから十月……トツキ……生まれたわ、咲太郎が。

月 十六の娘が、セーラー服の似合った小娘が赤ん坊を生んだんですよ。父親は誰です、な

んていう人、名前は、名前は。

御鈴  
ふふ……

月  
いくらきいても、泣いてたのんでも、この子は堅く口を閉じたきり、頑として一言ももらしません、あなたがそう言いつけたんですか。

速水  
まさか

月  
どうして、何故、だまっていたの。あたしはあなたの生みの母親だよ。

御鈴  
親にも言わない秘密ってものがあってよ、おかあさま。

月  
その秘密って、なんですか。

御鈴  
それはね、愛、でなければ死、その秘密よ。女にとって愛と死はいのちそのもの。あたくしが今日まで、世のほこりにまみれ、噂にもまれながら生き通してこられたのもそのおかげ。そうなると子供の父親がいてくれない方が却っていいの。男ってものは私の中のいのちに火をつけるマッチ。その役を果たしてくれさしたらたくさん。その火は男のいのちがなければ燃えないけど、燃えつきたマッチはそれっきりで消えてしまう。ところが、女のいのちは燃えたら最後、永遠に消えることはないわ。あたくしにとって速水氏は、今ではもう赤の他人。ですから、おかあさまにだって誰にだって、ほんとはわざわざ打ち明けることもないの。咲太郎も親子の名乗りなんて新派悲劇の真似する必要ありません。

月 ふーん。そうかね。あなた案外ドライなんですね。あのお祖父さまにもそういうところはあったよ。でもさ、それじゃ何だって今日の今、すべてをさらけ出しなすったの。全く茶番だよ。

御鈴 だまっていらっしやい。それはね、速水氏がこの崩壊寸前の玄書院を買いとって下さるから。

月 へえ！ この書院だけ。

速水 いえ、このお屋敷全部。玉川を越えた見晴らしの丘に、桃山調に明治調をミックスした風雅な家をたてたいと思ひまして。

御鈴 料理屋をおやりになるんですって。

月 へえ！ ですけど、あたくしたちはどうなるの、どこに住むの。あたくしたち。

速水 このあとに新しいお宅を建てます。あなたと奥さんと坊っちゃんとお三人ですから五間もあればよろしいでしょう。

御鈴 そしてそれを咲太郎の名義にして下さるの。

月 ありがたいような、そうでもないようなお話ね。だってこの家の跡取りは咲太郎なんだから、何れ名儀が咲太郎になるのは当たり前じゃない。相続すれば。

速水 はあ、それはそうなのでございますが、実は、  
月 なによ。

速水 実はこの家の現在の名儀はお宅様ではないのです。

月 なんですって。

御鈴 あたしもそれは最近になってわかった。

月 じゃ、いったい、誰が。誰の名儀……どうしてそんなことになってるのさ。あ、参っちゃん、どこへ行くの。御不浄。ちよつとね、行かないで聞いていて大事件なんだから。あら、あんた鍵の束、どうしたの。

参吉、立ち上がり、だまって出て行こうとした。

梶君 こんな化物屋敷を買うなんて物好きだなあ、お前の親爺。

咲太郎 親爺じゃねえよ、マツチ。

速水は参吉を途中で捕え、

速水 ねえ、行かないで下さい。御鈴さんは二十一年だまっていらした。あなたは六十年だまりつづけていられる。それは何故です。女の愛が御鈴さんの今おっしゃった意味で純粹であるならば、男の愛とはどんなものか、この際それを表明する義務がおりなのだ。

いえ、それは男性としての権利ではないのかな、僕はマツチにされちゃったけど。

月　ねえ参ちゃん、実印も預かっているあんたが知らない筈ないね。いったい誰、この屋敷のほんとうの持ち主は。かくさずに、正直に言って。

参吉　…

佐田さん　どなたですの。

柊さん　どなた？

月　世間知らずのあたしたち親子に代わって、長い間、この家の差配、やりくりをしてきたあなたにはほんとに感謝しています。あたくしを心配させまいとする気持ちも有難いと思います。でもこうなったら、ありのままを知らしてちょうだい。そうすれば、いくら呑気なあたしだって、

咲太郎　おばあちゃんのピアノ叩いてみるよ、おばあちゃん。わかるぜ、誰だか。

月　あ、そうだったね。(腰を浮かしたが) おふぎけでないよ。チュエベエト！

咲太郎　いくら名医でも身内の者のことになると誤診するからね。

月　はは…

女たちも笑った。

月 笑いごとではありませんよ、しかし、まあおよそ察しはつきますけど、銀行だね、参ちやん。

速水 ちがいますね。

月 ちがう。すると、高利貸し、ヤマワキみたいな。

速水 ちがいます。

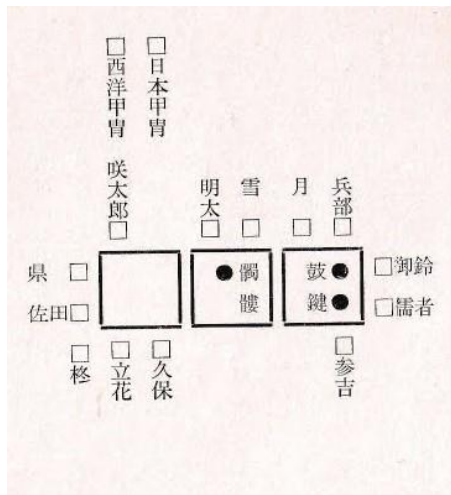
時計の音が一つ。オートバイが爆烈。

速水 では申し上げましょう。この屋敷の名義人。

参吉 それは私です。

## 5の巻

ここで、装置は、テレビのスタジオで各場に分散して設けられるように、各部分に解体されて、つなぎを失い、ばらばらである。例えば、上手では、襖がなくなって御簾だけ、下手では障子が同じく半分になり、納戸はやや真中に寄り、そして床の間の姿はなく、そこにピ



アノがおかれてある。まわりは黒か茶の幕ということになる。この狙いは、真中を広くとって動き易くするためと、心理的には空間と時間とをばらばらにしてある不安と、従って再びつなぎ合わせた全体を求めさせるための緊張を強いるためである。

シャンデリアの電気は三つしか光っていない。球がとれたり、線がきれてつかないが多い。

真中に膝ぐらいの高さの卓が三つ、くつつけて横に長く並べられ、最後の晚餐にあやかるわけではないが、そのまわりにおかれたスツールの数が十三。

全員が揃うまでにはまだ少し間があるが、そのときの着席表は次の通りとして、今、顔形がはっきりしない暗さの中で着席しているのは、明太夫妻と儒者と兵部一郎とを除く前場の十人。十人というのは床の間の前に、日本甲冑と西洋甲冑とが床几にかけていたからだ。

そして、兵部の席には鼓、明太の席には鬺、御鈴の前には鍵の束。

今、花が紅茶々碗を卓上に配り、長いコードのついた受話器を耳につけた速水が、上手下手、天井と手真似で合図をしていた。まもなく、シャンデリア点火。人の顔がわかった。下手の障子、上手の襖の上からマイクロホンを下げた棒が、それぞれ、一本ずつ出た。

終わった花は上手の納戸の中に侍立。

速水　どなたか声を出してみてもいいませんか、どなたでも結構です。

梶君　お前やれよ。

咲太郎　なにをさ。

梶君　声を出させるんだよ、あの爺さんに。

咲太郎　いやだよ。

梶君　彼の秘密に興味ねえのか。

咲太郎　俺には関係ねえよ。

梶君　大有りじゃねえか。

咲太郎　どうでもいいんだよ、俺には、この屋敷のことなんか。よくしゃべる女性と、なんにも言わんようだけども何か言ってるひとりの爺さんと、俺はもううんざりしてるんだから。だけどよ、さっきの一言はよかったね。「それは私です」こんな立派な日本語はな



かったんじゃねえのか、こんな美しい日本語はめったにねえな。

梶君 そうかね、そんなにいいか。文法に叶ってるからかい。

咲太郎 だからでもねえな。

梶君 じゃ、どうして立派なんだよ。

咲太郎 字に書いてもさ、「それは私です」だし、口でしゃべっても「それは私です」だろ、そこがいいんだぜ、きつと、な。

梶君 だけどよ、「私です、それは」とも言うぜ、話すときは。

咲太郎 そんなひっくり返したりするのは、俺はもう飽きちゃったよ。出たところ勝負で出たらめしゃべることしかねえもんかな。

梶君 出たらめ、出たらめっていうけど、出たらめにしかしゃべれねえもんな、俺たち。

咲太郎 俺たちそのものが出たらめってことか、要するに。

梶君 はは、心配するな、それで通用するんだから世の中は。だいたい、言葉って奴あ、相対的なもんだ。絶対じゃねえ。

久保さん おばあちゃま、おばあさま。

月 ……

久保さん 参吉さんに何か一言でも。

月 本人にきいてごらんなさい。(冷たい)

久保さん 参吉さん、あのう……

参吉はピクともしなかった。

立花さん 御鈴さん、あなた、なにか。

御鈴 御想像にお任せしてよ。(愛想はいいが、とりつくしまがない)

久保さん なんだか、こう、むずむずしてくるわね。

佐田さん はい。(勢いよく手をあげた)

速水 どうぞ。

佐田さん あなたは赤紙がきて、出征されたんですね。

速水 僕ですか。ええ、そうです。

佐田さん どちらの方面ですの。

速水 ええ、最初はビルマ、次はハリッピンでした。そこで降伏して、PW。

柊さん はい。(手をあげた)ビルマからですか。

速水 はあ。

柊さん ビルマからハリッピンなんて少しおかしいと思います。だってビルマから次はインパールでしょ。次は。

久保さん　どっちだっていいじゃない、もう、どうせ負けて、そして生きて帰ってこられたんだもの。

速水　恐縮です。

立花さん　内地に復員されてからですね、今日の今日まで御鈴さんとはお会いにならなかったんですか、一度も。

速水　お会いしたのはこの一月、いや二月ほど前ですね。

久保さん　ほんとかしら、ねえ。

柘さん　そうよ。どっかでおふたり、こっそり会ってらしたんだわ。臭いわ。

速水　そんなことは絶対ありません。

立花さん　怪しいもんね。しめし合わしたお芝居よ、きつと。

月　なにをおっしゃる。御鈴が男と密会するなんて、そんなことあるもんですか。御鈴は操正しい女です。第一、あんなに忙しいからだで男を相手にする暇もお金もございません。

柘さん　おばあちゃんの眼はふし穴かもしれない。

月　なんですって、もしこの娘が不義を働いたとしたら、そんなときはあたしのピアノにちやんと出ますからね。ちゃんと、なんなら叩いてみてよろしいわ。

速水　あ、それも面白いですが、そうしますと、おかあさんのピアノ占いは過去にもさかのぼることができるんですね。

月 もちろん、そうですね。

速水 ああそうですね、ではですな。肝腎の御鈴さんの御発言を聞いてみます。ピアノがなり

出すと面白いですが。ええ、速水氏とお会いになっていたのですか。いないのですか。

あら！ 変じゃない、少し。

自分のことじゃない。

ほんとだ。

自分が速水さんでしょ、自分が。

速水 そうですね。真相を突きとめるために、私は、ある客観的な存在物になっていることを御

諒解下さい。御鈴さん、今のお答えをどうぞ。

御鈴 会いました。

速水 ほう、お会いになった。いつです。

御鈴 終戦のある年です、咲太郎はもう三つになっていました。復員服で、この屋敷を訪問されました。

速水 目的は？ ニュアンスは省いて結構です。

月 あら、それ知りたいわ、あたくし。ニュアンス。

ほんと。

ドラマチックじゃない。

速水 ところが、御期待に背いて残念ですが、少しもドラマチックなどではない。

あなたはだまってらして。

久し振りに妻や子に会えると思って、胸おどらせて、なつかしき日本の土をお踏みになつたんでしよう。

御鈴 あのちよつと、

速水 速水氏と御鈴さんとは結婚してもいませんし、また息子の出産など知る由もなかった。ただ、

月 その通り。

ああ、そうか。

速水 四年前、ただ一度にせよ、ああいうことがあったのですから、たぶん暖かく迎えてもらえるだろうという肚だったらしい。

御鈴 らしいどころか、速水氏はあのことをあたしの愛情だとお信じになって、（傍白——みそこなっちゃいけないね）あたしが彼の帰国を首を長くして待っていて、（とんでもない）そして今や、あたしの夫になってもいい、当然そうなれるとお思いになった。まして咲太郎という子供もあるんですもの、男なら誰だって夫婦という枠をあてはめて怪しまないでしょう。（夫婦っていったい何なのさ。女のギセイの上になりたつ格子のない牢屋）しかしそれが男の自惚れだつてことに男は気がついていません。その無知がとてもあた

くしいやでした。更に言うならば、世の多くの女がその夫にすべて満足していると思っているとすれば、大まちがいですね。

月 今の世の中は父系制度ですからね、仕方がないさ。速水さんの罪じゃないよ。

御鈴 ですけど、女からちよっと親切にされたからといって、自分に気があるみたいに思い上がるのはどうということでしょう

速水 あれがちよっとした親切でしょうか。あなたが速水氏の前からだを投げ出したということが。

御鈴 あら、あんなこと、あたしのちよっとした親切よ。かりに大した親切にしても、それは愛ではありません。

速水 そういって、御鈴さんは速水氏の復縁、も変ですが、申し出をきっぱり拒絶されました。怒ったでしょう。

御鈴 そうですね、定めし、なんて冷たい女だろうとお思いになったことでしょう。(急に)ねえ、速水さん、あたしたち日本語で話してるんでしょうか。まるであたし、検事の尋問にあってるみたいだわ、はは……でも、こういう日本語もあっていいわ。そう思いません。

速水 そう、大いにそうです。検事の訊問など平気で耐えるほどにすっかりした日本語、しかし、あのときは参りました。すっかり男としての自信を失いましてね。しかしおかげで、

何くそっと思っ、私の新しい夢が始まったのです。ということにしておきまして、ちよつと失礼します。(出て行つた)

つまんないの。

えてして客観性はつまんないものよ。

あれじゃ、鈴ちゃんに振られるのも無理ないね。

中性的だね。

にやにやしてて気味悪いですね。

美男子でございって顔してるけど、中身がないもん、中身が。

ねえ、あの人、ほんとに咲太郎さんの父親かしらね。

ほんとの親だったら、もう少し何とかねえ、人間らしい感動がさ。

そう言えばあんまり似てないわ。

どう咲ちゃん、浮かぬ顔してるけど、御感想は？

お小遣もらいに行くところができていいじゃないよ。

咲太郎　うるせえな。あいつは親爺でも何でもないよ。

おや。

梶君　じゃ、他の何だい。

何だと思ふの、咲ちゃん。

咲太郎 影武者さ。

影武者！

—— 梶君 そんなら、誰の影武者だよ。

—— 誰の

速水が急ぎ足。

速水 録音の調子いいそうですから、只今から本番参ります、お静かに。

速水の合図で、甲冑たちの出番。

日本甲冑 御同役、いかがでござる、この家に仇なす魔者は。

西洋甲冑 されば、<sup>ウシ</sup>丑寅の方角と存する。

天井から照明燈二基下りて兩名が浮かび上がった。

日本甲冑 丑寅の方角とは。



西洋甲冑 目前に居る。

日本甲冑 ふむ、いずれぞ。

西洋甲冑 それ、その小わっぱ二人と、女豚の如き女郎めの四人と西の女。

日本甲冑 斬って棄てようか。

西洋甲冑 先ず待たれよ。

日本甲冑 待つこと久し、今日こそ、われらが役目を果たそうと存する。

西洋甲冑 はは……

日本甲冑 なんとなされた。

西洋甲冑 兵法を変えようと存する、時勢でござる。

日本甲冑 なんと変えられるる。

西洋甲冑 言葉でござる。

日本甲冑 やあ！

西洋甲冑 なにが、やあでござる。

日本甲冑 言葉は苦手でござる。得手の方を使いたい。(佩刀を鳴らした)

西洋甲冑 はやまるでない。武力の行使は永久にこれ、放棄したではござらぬか。

日本甲冑 自衛のためなら致し方がない、この甲冑にこの刀、伊達ではござらぬ。

西洋甲冑 先ず、待ちやれ。試しに問うて見ようと存するによって、そなたはここで大人らしい

構えておじやれ。

前に出てきた。

西洋甲冑　ものもう。

咲太郎　なんだい、何か用か。今日はきれいだな。

西洋甲冑　この甲冑、伊達ではござらぬ。

咲太郎　あ？

西洋甲冑　伊達とはいかなることか、言うてきかせられい。(花子に)言うてきかせられい。

花　知らんと。

咲太郎　ダテ？　そのくらい知ってら。

西洋甲冑　どのくらい知ってか。

梟君　おしやれってことだろう。

西洋甲冑　ボチボチの六十五点にまけてつかわす。これにはいかような漢字を書くか。

梟君　漢字？　お前知ってるか。

咲太郎　ダテねえ……劃の多い難しい字だよ。

梟君　当用漢字に入ってる？

西洋甲冑 二字のうち一つ入ってござる。

咲太郎 だからだ。

西洋甲冑 落第。留年。

元に戻った。

咲太郎 仮名で書けば簡単じゃねえか。

梶君 そうだよ、日本語なんて全部仮名かローマ字にしちやえばいいんだ。国語の試験は楽になるぜ。

花子 漢字でん、やさしかとならよかばってんなあ。

西洋甲冑 あの通りでござる。

日本甲冑 嘆かわしいこととでござる。(軽蔑して) 仮名! ローマ字! ペツ。

西洋甲冑 手剛い魔でござる。

日本甲冑 いかにも。

西洋甲冑 なんとしたらよかろう。そもその考えからちごうてござる。

日本甲冑 教育でござる。小学校よりの教育でござる。この「学校」は。

西洋甲冑 学校は。

日本甲冑　これ、花子殿、そなた「学校」なる漢字をいつ覚えられた。

花子　よう覚えとりまっしえん。

日本甲冑　まっしえん。

咲太郎　三年か四年だな小学校の。

西洋甲冑　かくこうがくこうと、一年生でも日頃常用する言葉なるを何故に一年生に教え、覚えさせぬか。

県君　劃が多くてむつかしいからね、一年生には。

日本甲冑　学ぶ校舎、学校として覚えさせれば、いささかも難事ではない。やさしき平仮名片仮名より始め、ほど経てそれに当たる漢字をあてはむるは、さも正しき教育法なるかに見えて、まこと、生徒の能力を知らぬのでござる。国民の大腦組織を甘やかし軟弱化、無力化する素因こそ、これなる考え方。またその尻押しはアメリカ連邦国。

西洋甲冑　教育を司る日本政府、そもそも、漢字が嫌になり申してでござろう。明治よりこのかた、国語の委員会あまたござれど、目ざすは漢字。漢字が目の敵でござる。

日本甲冑　日本は漢字によりて亡ぶ、お偉い方がかように仰せられた。よつぽど漢字に閉口されたのでござろう。されば若い者に漢字では苦勞させまじ、その代わり、他の有用なる学問に時間をかけたがよいと、有難い親の心でござれども。

西洋甲冑　親の心子知らず、苦勞せぬことのみ、そのやり方のみ覚え、物の理ことわりをじっくり探る

を厭う。己が血肉たる知識浅く、すべて〇×式マルバツにて間に合わせ、目先のこと足りれば安んじてレジャー、ヴァカンスをたのしみ居る。

日本甲冑 したが御同役、これもそもそも、日本人を骨抜きにする占領政策の名残りとは思わぬか。

西洋甲冑 やあ！

日本甲冑 鉄砲、大砲、軍艦、飛行機、われらあらゆる武器を捨てましたなれど、日常普段の暮らしに大砲はいらぬ。したが心の武器を奪われては何といたそう。

西洋甲冑 いや待ちやれ、武器は武器、心のものとしてそのように危いものは物騒でござるによって、何によらず武器は捨てたがようござる。そなたの考え方に何やら不審はござらぬか。

日本甲冑 これは参った、さらば武の代わりに文にしよう。文器はいかがでござる。

西洋甲冑 ブンキ、奇妙なれど、そうと思えば奇妙でない。

日本甲冑 されば心の文器とは言葉、言葉も漢字でござる。漢字なくして何処に日本人の心が宿ろうぞ。

梶君 おいおい、だまってきたら、いい気なもんだな。俺たちに漢文を書いたり、漢語でしゃべれっていうのか。あきれた。

咲太郎 この連中は昔が恋しいんだよ、昔が。

日本甲冑 漢字は中国渡来にはござれども、何百年何千年の昔より日本語に、帰化し、全くの国

語にござる。祖先の血がしみこんでおります。伝統の無いところに真の文化はおじやらぬ。

西洋甲冑 そなたらの文化は民主々義の仮面をかむる植民地文化でござろうぞ。

梶君 いいよ、それでも。進歩のための段階ならな。

咲太郎 だいたい、口に出してしゃべれねえような思想は思想じゃねえ。漢字は紙の上に字を書くのだ。書くということは二次的三次的なんだぞ。

日本甲冑 しからば問います、一次的なるものとは何でござる。

咲太郎 そりゃ、平仮名で考えることさ。

梶君 片仮名で考えることさ。

咲太郎 そしたら、すらっと口から出らあ。

梶君 誰だってしゃべれらあ。そこが民主的なんだよ。

日本甲冑 民主的とは出鱈目のこととでござるか。

梶君 なに。

日本甲冑 己れ自ら先刻そのように申された。

梶君 あれはわざとそう言ったんだ。わざと。この連中には皮肉がわかんねえんだ。

咲太郎 この連中には、偶像を破壊しながらしかも何かを欲しがっている俺たちの切なさはわかんねえ。いや、ここにいる誰もわかっちゃいねえ。

—— やっぱり欲求不満だわねえ。

梶君 いやんなっちゃうな、このおばちゃんたちは。

佐田さん あら、失礼ねえ。

柘さん え、鎧……さんたち。この人たちはねえ、結局、能率さえよければ、便利でさえあれば、字なんてどうでもいいんですよ。だから字はね、この、口から出る音に合えばいいってこと。意味なんてあとから自然に。

日本甲冑 さればこそ我ら邪々張り、その不埒なる主義を打ち砕き、

西洋甲冑 世の中とは、事務のみに非ず、利益のみに非ず、理屈のみに非ず、

日本甲冑 血もあり涙もある人間が、千年以上もかけて作り上げたる言葉をば安んじてたのしみ合うものでござる。

梶君 人情論だ。日本人の好きな人情論だ。

咲太郎 だから血の気を抜いた文章が書けねえんだ。哲学が生まれねえんだ。

速水 だいぶ白熱して参りました、極端なる表音派と極端なる表意派とは、このように意見がくいちがうのでありますが、ところで、日本語では哲学は書けないという問題が出て参りました。ゲストの方、どうぞ。

納戸から儒者。恭々しく一礼して定め席に着いた。

速水 あのうち、あしはらの瑞穂の国は神かむながら言挙げせぬ国、などと申しましてね、理屈は言

わないで、ただ道をたどり歩いていけばいい。但し、その道を、美しく知る、という字をあててありますほどで。

儒者 そはかの宣長なる国学者の言葉にて候わずや、彼の者、神秘主義者にて候えば、美しさに

憧るるあまり、宇宙陰陽の性理を忽にし、日本人を物の哀れにのみ押しやりて候。

速水 宇宙陰陽の性理って何ですか。

儒者 宇宙は空気にて候。

速水 なるほど。

儒者 気は半ば陰にて静、半ば陽にて動。陰の気より金と水、陽の気より木、火の素もと生ずるに

て候。これに土の素を加え、これら五行の組み合わせにて万物生じ、万物の頭たる人間もこの例の他にては之無候。これ即ち朱子の説。

速水 朱子。そうすれば元は漢文、仮名をまじえない漢文で書いたんですね。

儒者 さなり。されば哲学は漢文にても語るべく、仮名まじりの日本文にては哲学する更に苦しからず。

速水 いやどうも有難うございました。だいぶ皆さんお疲れで、欠伸なさる方もおいでのよう  
ですから。



そうじゃないのよ、退屈してるんじゃないのよ。

待ってるんですよ、あたしたち。

焦らさないで、早く解決つけて、速水さんとやら、哲学はいいから。

早くう。

速水 それは僕も望むところなんですが、なんしろ。

参吉を見た。皆も見た。

参吉は動かない、そのとき、静かに。

儒者 参吉。

参吉 (顔をあげた)

儒者 わしの声に覚えはないか。

参吉 ……

儒者、頭巾をとり、衣裳を脱した。儒者変じて医者。

頭は総髪（江戸時代の医者）、下は、ぴったり窮屈なほどの背広の上下、胴衣、時計の鎖。

参吉 あ、お父さん。

医者 わしはお前に家業をついでもらいたかったな。祖父の白亭先生は今見たように駿河藩の学問所の儒者、父の徳庵先生は同じく儒者にして蘭医、長男のわしは帝国大学医科で青山胤通先生に師事し、学を卒えて静岡で内科を開業したように、わが望家は由緒正しき選ばれた家。ああ、わしがダルメイダ殿の脈をとったのが運の尽きであったな。何に魅入られたのか、それまでの方針をひるがえし、お前は考古学を勉強したいと言い出して、この望家もお前の代で断絶じゃ。しかもお前は、静岡の土地、先祖代々の土地を少しづつ売り払い、とうとう全部他人の手に渡した。お前が考古学をやる学資にしたのならそれもよかつたろうが、今のお前は兵部家の下男、たかだか三太夫ではないか。

月 お父さんだからきびしいわね、昔気質だし。

医者 お前の身銭を切ってまで主家のために奉仕をなしたと言えば健気だが、お前の一生を棒に振ってしまったな、参吉よ。

参吉 そうでしようか。ただしかし、わたくし（初めてそう言った）のように原罪を背負っておる者は、一生、その罪の償いをしていかねばなりません。

医者 ふむ、原罪か、

参吉 ですからわたくしは、一生この兵部家に仕え、飼い殺しにしていただければ満足なので

す。

一同の嘆声。

甲冑たちは金具をならした。

医者　しかし参吉よ、お前のその志を誰が認めてくれる。お前のその徳を誰が有難いと思うて

くれる。

参吉　徳などとはとんでもない。あなたもやはり、おわかりでない。

医者　わからんよ。あたら男の一生を何のために長らえた。

儒者、今では医者だが、卓上の鼓をとり、勇ましく二度打って、

医者　兵部一郎に鼓を打たせ舞を舞わせ、だらしない月殿を悦ばせるためか。御鈴殿に女の

いのちを誇らせるためか。

兵部一郎、納戸の閤の上に立った。素謡の装い。

参吉 はい、その通りと申し上げたら……いや、なにも申しません、やはりだまっている方がよかった。

兵部 私をよんだ。

月 あなた、こっちよ、あなたのお席。

速水 さ、どうぞ、兵部さん。

月 あたしの傍だからいいでしょう、旦那だもの……さつきから、あたしひとりで心細いのよ、ひどい悪口は言われるし、娘は魚みたいに黙ってるしね。

兵部 ……

月 とてもはにかみ屋ですの、さ、いらっしやい。

兵部 参吉、あとで一緒に舞おう。(消えた)

速水 あ、兵部さん、ちよっと。

月 だだっ子！

月 いい男じゃない、おばあちゃま。

月 あらそう。

月 だから、男は皆死んじゃうんでしょ。この家。

月 女が強いんだもん、この家は。

月 あんなしっとりした男はもういないね。

県君　　なんでえ、もやしみてえな男じゃねえか、お前の祖父さまは。

咲太郎　陰花植物だからな。

県君　　お前、案外、漢字知ってるな。

咲太郎　これでも俺、勉強してんだぞ。

県君　　来年は就職試験か、あ、あ。

い　　い　　い  
お　　お　　お  
ど　　ど　　ど  
ろ　　ろ　　ろ  
か　　か　　か  
な　　な　　な  
い　　い　　い  
。　　。　　。  
　　(はやり歌の節をかりた)

おどろかない。

しかし、そうは言ったものの、一斉に溜息した。

県君　　だけど、お前なんか遊んで暮らせるからいいじゃねえか、こんな大それた屋敷に住んで

るんだもん。

咲太郎　あほう、人手に渡ってるんだ、実際は。

県君　　そうか、だけどお前、速水氏の説によれば、やっぱり、お前のもんになるんだろ。

咲太郎　(小声で)あいつの言うこと信用してんのか。

梶君 あ？

咲太郎 見ろ、あのシャンデリア。昔は全部ついてたんだそうだが、鹿鳴館のころまではな。それが一つ消え二つ消え、今じゃ、二つしかついてないだろ。それも今に、ほら……消える。あいつも消えるさ。

二つのうち、一つが、ゆらめきながら消えた。

咲太郎が叫んだ。

咲太郎 なにもかも消えるがいい。骸骨も鼓も。消えろ、抹殺だ。

梶君 お、おい、どうしたんだ。

ピアノの音がした。前奏。

弾いているのはダルメイダ。歌うのは雪。

雪 ゆき！ ゆき！

ゆきやいとしき

ほろほろとちりしき

くろきつちうるほい

あたたかきはるをさそい

はるかなるいのち

やよ、ふきあけよ

とわによ、ゆきよ！

歌いながら雪は甲冑たちの拳手の礼の前を定め席の方へ歩いてくる。歌の途中で一発、オートバイが爆烈疾走。皆はその美しい声に聞き惚れたが、咲太郎と梶君だけは感動を拒否し、参吉は逆の意味で苦しかった。

咲太郎もまた爆烈。

咲太郎　たくさんだ、もう、たくさんだ。抹殺だ。幽霊の使う日本語は抹殺だ。

月　　変な子だよ、お前は全く。この世に幽霊なんていませんよ。

医者　参吉。フランス語にな、フォール・コム・ラモール言っただけ……「死の如く強し」ってんだが、これを日本語に訳すとだ、「死よりも強し」となる。「死の如く」では硬いからね。語呂もよくない、ごつごつしとる。ゴといういかめしい濁音が入る。コムフォールラモールのようにやわらかく流れない。そこで「死よりも強し」となる。これが日本語

だな。

月

ところがね、お父さん。この頃の発音は、やはり若い人ですがね、ガ行の濁音をみんなそのいかめしい濁音でやります。鼻にかける鼻濁音をやりません。いえ、やれないんです。「花か咲いた」も「花が咲いた」ですね。普通の濁音と鼻濁音との区別を知らないんですよ。アクセントもどっちがほんとうなのか二通りのがふえましたしね。美しいセクスがないんですね。フォールコムラモールか！

—  
いったい、それ、何のことぞんす。

医者

愛じゃよ、いや、わが輩はあまり使わんが、恋といった方がいいかも知れん、どうだな、参吉。

女たちは肯いて囁き合う。「フォールコムラモール」

明太と雪は中央の席についていて、明太は髑髏を手にとった。

明太

フォールコムラモール！

雪

あたしならばね、あなた。

明太

はい。

雪

「死ぬほど強い」ってしますわ。だってね、愛と死とは同じなんですもの。



明太

ほう！

雪

もしその愛が純粹ならば、愛するってことは死ぬことだわ。そうじゃない。

明太

うむ、あなたはフランス人だね。

雪

いいえ、ただの女。

そして夫婦は親しく接吻した。

花子が奇声を発した。

花

ああもう！

女たちが一斉に笑った。夫婦は立って寄り添いながら、向こうに歩く。

参吉が不意に起立した。

参吉

これが、これがおかしいか、これが。美しいとは思わんですか。ひとりの男とひとりの女とが、ふたりだけで、永遠の世界を作っているのが美しいとは思わんですか。死のように美しいのではないのですか。こういうわしは、わしは、前に言ったようにその資格がない。しかし、どんなにその美しさに憧れたことか。神は主<sup>ぬし</sup>ある女をわしに与え

た、刑罰として……わしのようなエゴイストにふさわしい罰だ。雪様初め皆様へのわしの奉公を純粹、純情だなどと誤解しないでいただきたい。なるほどわしは、わしの全財産を主家のために蕩尽し、由緒ある望家を断絶させた。そして主家に尽した。しかしそれはあくまでもわし自身のためだということをお忘れないうことです。明太様がしゃれこうべが欲しいと言われれば、兵部家の墓を買って差し上げた。一郎様の父上が道楽者で遂には先祖の墓をあばくことさえ金のために許したのをお世話しました。

一同のおどろき。

月  
そして、月様が一郎様と夫婦になりたいと熱望されれば、  
あら、熱望だなんて、いやだわ。

一同くすくす。

参吉  
しかるべく工作してこちらに輿入れをおさせ申したのもわたくし、一郎様が月様のお肌の色を気に入られたのは何よりも幸いでした。  
月  
へへ……よけいなこと言わなくてもいいよ、参ちゃん。

参吉 当時、兵部家には借財しか残っていない。この屋敷も担保に入っていた。それをきれいにしたのもわしがしました。それをわしの名義に勝手にしたのは最近になってからでございませう。

速水 それまで御鈴さんの名義だったのを何故、あなたのに書き替えたのですか。

御鈴 何故なの。

参吉 はい、それは……近年、あなた様は色々の事業をお始めになりました、速水さんと組んで、お商売のようなことにも手をお出しになるうとする。そのとき、資手になるのはこの広い屋敷、ですからわしは御鈴様の危険な投資を未然に防ぐために、わしの名義にしたのでございます。わたくしの浅智恵でござりました。

御鈴 うそおっしゃい。あなたはね、あたしと速水さんの仲をそねみ、うらやみ、嫉妬したのよ。

医者 おう。

参吉 そうおとり下さってあなた様のお気に入ることなら、それでもよろしいのです。

医者 お前、そのように卑劣な下心があったのか。

参吉 ああ、わしはまだまだ、いたりません。我執がございませう。疑われるのも無理はない。

雪 参吉さん。喉かわきました。あたしにお紅茶、

参吉 はい。

雪 旦那と二つね、熱くして。

参吉 はい、只今。

起って御簾の方へ。

医者 動くな参吉。

釘付けになった参吉。

雪 早くね、参吉さん。

夫婦は席についた。

参吉は再び動き出す。

「参吉」と一喝した医者、ずかずかと真中に出て、骸骨を手にとり、突きつけた。

医者 お前の姿が、お前がこれだぞ。

参吉 望むところですよ、お父さん。

医者 これなんだぞ。

参吉 はい。

医者 (処置に困った) うーむ。

参吉 (手を出して) どうぞ、いただきます。

咲太郎飛び出した。

咲太郎 返しちやだめだ。そんなもん叩きつけて打っこわしゃいいんだよ。

月 咲ちゃん。

明太 咲太郎、それは君の十三代前の。

雪 篤磨様のしやれこうべよ。

咲太郎 そんなもんがあるから崇るんだよ。こんな不潔な、いやらしい爺がまといつくんだよ。

さ、かして。小父さんがやらないなら、俺がやるよ。さ、くれよ、俺に。

明太 はは……崇りなどはしません、咲太郎君。日本人の骨格の型がね、どんなに変わるか、徳川初期の一つの見本として大事なのですよ。それはもう兵部家の幽霊などではないのです。そして、わたくしたち夫婦にとっては参吉の献身の永遠の徴でございますからね。望さん、わたくしにそれ、返して下さい。

医者は返した。

医者 兵部篤磨と言えば、近衛の大將だったお方だ。へえ！

明太 ほら、この齒並びにしても、今の人のとはちがいますでしょう。

咲太郎 お祖父さん、日本には幽霊が多過ぎるね。

明太 しかし、よい幽霊ならわたくし好きです。

雪 ほほ……

咲太郎 このおばあちゃんのさっきの歌だって幽霊的だよ。あれには濁音がないだろう。だけど

俺たちは濁音が好きなんだよ。ばりばりしゃべり、がさがさ歌いたいんだよ、俺たちは。

（県君に）な。

県君 へへ……

速水 ああ、安心しました。一時はどうなるかと思って冷や冷やしましたよ……僕はなごやかなホームドラマが書きたいのですから。さ、どうぞ、皆さん、お座り下さい……参吉さんもどうぞ。

参吉はしかし、ゆっくり、御鈴のうしろに立った。

参吉

奥様、差し出がましいことをいたしました。速水さんからお聞きのように、このお屋敷は安泰でございます。さて、お紅茶を持って参らねばなりませんので。

行こうとするのを花子がとめて、駈けよった。

花

そげんこつあうちがする。かあいそうに！ こん家<sup>ね</sup>じゃ誰<sup>だる</sup>も参吉さんに同情する者あらんなあ。咲太郎。

花子の憤った言動はティーチ・インの筋書にはなかった。なので一座は混乱し、アルバイトで、出演した諸人物、一の巻の冒頭で紹介された、は役を忘れて自分の地に戻り、うろろうるばかり。

咲太郎

あ？

花

おうちはさつき、この人のことばいやらしかて言うたな。

咲太郎

ああ言った。

花

そういうおうちこそ不潔でいやらしかじやなかですか。学生なら学生らしうきちんとし

まっせ。まっせ。盛り場ばうろつくチンピラのごたる。  
おっ。  
梶君

参吉は消えている。

花  
そんげんやくざ振って偽悪者ぶって、いったい何の切なか悩みがあるかというと、参吉さんが……あら、おらん……参吉さんが一生かかって突きつめて、探りに探ろうとしたるごたることば、おうちは今までのこたあつとへ。煙草銭に困るとかたかだか就職試験のことでしょう、そんげんことじゃ大人物にはなれん。日本ちゆうちいさな島国の、またその中の粟粒のごと小さな人間たい、おうちは。  
月  
やられたね。

甲冑たちは金具をならし、御鈴をのぞいて笑った。

咲太郎  
あああ、またひとり女がふえた。おれは日本を脱出してえよ。

また笑った。



参吉が出た。ゆきの傍で。

参吉 ガスをつけて参りましたので、しばらくお待ちを。

雪 ごくろうさま。

参吉 はい。

御鈴 参吉。

参吉 は。

御鈴 (鍵の束をとって) これ、なくすとたいへんよ。(渡して、片手を出し) ごめんね。(にっこり！)

参吉 は、わし、わたくしは……

明太 参吉はよい発音をする。少しも崩れない。「それは私です」の私にしてもそうだね。

参吉 は、旦那様。

明太 近頃の人々は、あたし、だか、わたし、だかどっちかわかりません。日本人は段々唇を使うのを怠けるようになりました。ですから、ワキウエヲの発音もよくできません。惜しいですね、その皆様はどんな発音をしていらっしゃるんですか。

女たちはにやにやもじもじ。

「もういいかい」、一郎だ。手に扇。

参吉、鼓をとった。

参吉 (女たちに) 皆様もどうぞ。

日頃の腕前の見せどころ。

発音をきいていただきましょう、発音を。

あら、扇子は。

持ってるつもり、つもり。

さ、君たち、テーブル片づけて。

はち音のいいところをきかしたげる、はち音をね。

地頭は。

御鈴さんよ。

がやがや言いながら、御鈴を初め女五人、下座に並んで正座した。その他、速水は諸人物を指図する。

明太夫婦の卓のみ残して、他の二卓は隅へおしやられ、参観者は、速水を除いてすべて正座した。

用意ととのった参吉、「あおう！」と一発。  
女たちの地謡が、扇子をとった（ふり）。  
急に参吉。

参吉

濁音はわしはきらいだからな。絶対音で、国語の絶対音で参ろう。い、やあ！

鼓を打った。

女たちの地謡。

さてその謡。

いろはにほへとちりぬるを  
わかよたれそつねならむ  
うゑのおくやまけふこえて  
あさきゆめみしゑひもせす

舞うのはひとり、兵部一郎。

速水の頭の受話器のコードがしきりに引かれて、速水はよろめき、

速水

へへ……猿廻しの猿みたいでございましょう。いや全くその通りなので、僕は、もうおわかりでしょうが、影武者、代弁者なのでございます。猿を廻す影がいるんです。誰だって、つまり……

強くひっぱられてよろめきながら「はい、引っこみます、引っこみます」と袖に消える。

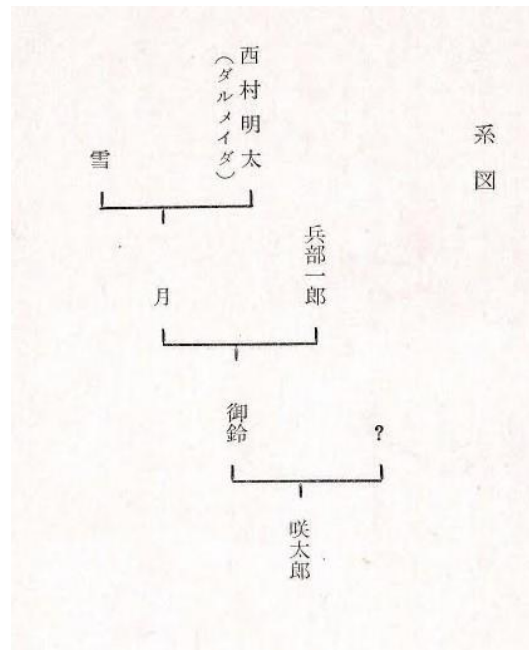
謡と鼓とそしてバツハの音楽と共に、幕が下りたらいいだろう。いいだろとういうのは、山田花子の亭主、山口寅吉がねんねこはんで子供を背負って、おしめ袋を片手に、やがて現われるからであった。「おい、お前や、いったいなんばしとつかこげんところで、おかしなかくこうばして」。

しかし、

司会者としての速水の役はまだ完了していない。突然の侵入者で、再度の混乱に憤慨した彼は、出て行った夫婦を追って飛び出し、レシーバーを叩きつけ、両腕をあげ、怒りと絶望とを爆発させた。

— 幕 —

系図



底本

『田中千禾夫戯曲全集 第六卷』(全七卷)

株式会社 白水社

一九六七年二月一日印刷

一九六七年二月一〇日発行